

狂う、狂った物語

ウ"アイス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある世界で一人の人間が死んだ。真っ白な空間の世界の中で男は一人、転生する。
生まれ落ちたところは日々が戦場のスラム街。毎日を生きるために殺し合う日々。
そんな世界の研究施設の中に生まれ落ちてしまつた。

女として。

なろうから移転してきました。以前書いていた奴のリメイク番なんですが、なろうに
載せていたリメイクの方は消しましたが原本となるリメイク前の奴は消してません。
もし、問題がある様なら消します。

目次

プロローグ	この閉じられた部屋で	旅にでます。探さないでください	34	17	1
48	そこはゴミだめの街				
道化はただ闇に					
集う者たち					
それが炎の女王					
上も下も戦場					
116	98	81	65		

プロローグ

誰かが呼ぶ。だけど俺は動かない。

誰かが叫んだ。だけど俺は言葉を返さない

誰かが泣いた。だけど俺はなにも感じない。

……だって俺はすでにもう死んでるのだから。死者である俺が生きてる誰かに語りかけることはもう二度とないのだから。

1

落ちていた真っ白な空間の中を上も下も右も左もなにもかもがわからない真っ白な空間の中をまるで落下するような感覚で。

わけがわからなかつた。目が覚めたらこの空間にいたことじたいがわけがわからなかつた。なんで落下してるのかがわけがわからなかつた。なんで真っ白なのかがわけがわからなかつた。

それでも空間はかわらなかつた。

状況に理解が追いつかない。脳が正常に動かない。いつたい俺は何時間こうしてればいいんだろうか？体感時間にすれば数時間？いや、もしかしたら数十時間？数分？わからない。

そもそも死人である俺に脳があるかがわからない。肉体はあるがすでにこの身体は死に絶えたはずだ。ただ生前のこの身体がイメージとして俺の視界から見えるだけなのか。それとも本当にこの肉体が存在しているのか。

もし肉体が在るのなら、俺は生きているのだろうか？

「いや、君は死んでるよ。それに閑としては間違いないね」

声が聞こえた。振り向けばそこにはシャツとジーンズだけというずいぶんとラフな格好をした青年が浮いていた。そう浮いていた。俺のように落下しているわけでもなく、彼は“浮いていた”。

「お前は……」

「僕かい？僕は……神さ。まあそれを信じるか信じないかは君次第だけどね」

青年は神と名乗つた。馬鹿馬鹿しいかぎりだと思つたが、この状況以上に馬鹿馬鹿しいことなんてあるのだろうか？

「言つたろ。信じる信じないかは君の勝手だつて。まあそれより僕は君に伝えることがあつて来たんだよ」

「いつたいなにを伝えるつてんだよ。死んだことはこれでも自覚している。それともこれから俺の逝く末つてか?」

「ん~まあそんなとこかな?おめでとう。君は選ばれたんだ世界に、新たに“神の卵”に、僕は祝福を送るよ。それは辛く苦しい永遠の苦行だと言えるけど、あえて僕は祝福を君に送ろう」

青年は細めていた目をさらに細めながら言う。ツンツンと尖った青年の黒髪がまるで風に流されるように靡いた時、俺は気付いた。風もなにもない。ただ真っ白なこの世界でなぜ、彼の髪が靡くのか。それは簡単な答えだつた。

白い。真っ白な翼が青年の背中から生えたのだ。生えた三対の白い翼。それがなにもないこの真っ白な空間に風を与えていた。

「どうかな。これで少しは僕が神であること信じてくれたかな?」

「鳥人?」

「つておい……。神を鳥人扱いって、君はつくづく変わっているね?普通だつたら君は消されても不思議ではないんだからね」

呆れるように言う青年を無視しながら俺は青年の背に生えていた翼を見ていた。なぜだろう。どうしてなのか、それを見た瞬間から嫌悪感が湧いて止まらない。憎くてたまらない。彼を殺したくて堪らない。ただ翼をみただけで、どうしてこんなにも殺意が

湧くのだろうか？

「……今の君じや僕を殺すのには役不足だね。どう足搔いたところで君じや僕には適わないよ。今だ神の卵になつてすらない君など赤子の首を捻るのと同程度の手間しかない」「だつたら殺せばいいじゃないか」

「そうはいかないよ。世界は君を産んだ。それは決定事項だ。いくら神である僕でも今この君を殺したとなれば僕は世界によつて滅つされる。全知全能、不死身にして神なる僕でも世界の楔にかかれば呆気なく滅つされてしまうのさ」

まるでまいったというように青年は言い。そして翼をはためかせた。羽ばたく翼からおくるられる強風に流れながら青年は俺に向けて言つた。

「世界の掟は絶対だ。君の魂がここに来たことがそれを示している。だからこそ僕は示さなければならない、君の逝く末を」

「俺の……逝く…末？」

「そう。君には転生してもらう。よかつたね。もういちど君は生を全うできるんだよ？喜びなよ？だけどそれが辛く長い苦行の始まりだつたしても、それは変わりようのない真実だ。例え傲慢な神であろうが、変えることなんてできない。君は背負わなければならぬんだ。世界を、人を、そして……”魔”を」

いつたい青年がなにを言つてゐるのかわからなかつた。ただわかつたことが一つだけ

あつた。それは俺が“生き返る”ということだけだ。死んで、生き返るなんであるで転生するみたいだなと思つたが青年の顔を見る限りあなたがち間違いではないのだろう。

「そうだよ転生だ。肉体を一から作り替え、新たな肉体へと再構成するんだ。性別なんてランダム。そして君は覚醒するんだ。『神の卵』として」

「覚醒？ 神の卵？ さつきも言つてたがなんなんだよそれ？」

「おつと僕が今教えられるのはここまでかな。後は君が覚醒してからになるかな？ さあもう時間だよ。良い子は目覚める時間だ。大丈夫また会えるよ。今はお別れだ」

じやあねと手を振る青年を見ながら俺の意識はまるでパソコンが強制的に電源を切られるように、意識がブラックアウトした。

2

目が覚めたらそこは暗闇だった。真っ白な世界に続いて今度は暗闇かと悪態をつきたいところだつたが、そこで俺はあることに気付いた。背が地についてる感覚があつたのだ。ごつごつとした堅い感触、まるでコンクリートの上に寝転んでるような感覚。だから気付いた。

ああ、ここは現実なんだなつと。

よく目をこらせば暗闇になってきたのか周りが見えてきた。狭い狭い一室の部屋の中だということがわかつた。そこの真ん中に仰向けに倒れる様に俺は寝転がつていた。周りには壁以外は何もなかつた。

起き上がろうと身体に力を入れると身体に全く力が入らないことに気付いた。まるで自分の身体じやないような錯覚もでてきた。それもそうだろう。必死になつて反身を起こしてみれば、その身体は俺じやなかつたのだから。中身だけそのままで、外だけを作り替えられたこの身体はたつた四五歳程度の少女の身体へと変身していた。

それはないだろう……。生前男だつたことからにして意識を保つたまま少女の身体に変えられては、不便どころではない。

起き上がらせた反身を倒して、また俺はコンクリートでできたと思われる床に寝転がつた。なにもないこの部屋と力が入らなくてなにもできないこの身体で俺はいつたいなにをしろというのだろうか？やれることなど眠ることぐらいしかできないだろう。

目が覚めたらそこは明るかつた。そして周りが煩かつた。どうやら俺以外に誰かがいるようだ。それも一人や二人ではない。多くて十数人。少なくて数人といったところだろう。

余りに物騒がしさに眠気も飛んだためにとりあえず起きることにした。というか煩すぎるから文句の一つでもいうために起きなければ。

倒れていた身体を起こし、その場に立ち上がる。眠る前は力が入らなかつた身体がなぜか不思議なことに力が湧いてくるぐらいに馴染んでいた。固まつた関節をポキポキと音を鳴らし、俺は深く深呼吸。

「うつせえええぞーおるあああああつっ!!」

とりあえず周りで泣き叫ぶガキどもに怒鳴つてみた。うん。俺は悪くない。だつて安眠妨害されたらきっと誰だつて怒るよ。そしてぴたりと治まる喧騒。相変わらず部屋のど真ん中で眠つていた俺はそのまま放置され、そして起き上がつた俺を囲むようにいる八人のガキどもが俺の怒鳴り声に驚いて泣き叫ぶのを止めた。

「うそ……生きてるの?」
え?俺つて死んでたの?



治まる喧騒。綺麗な蒼の髪の少女の怒鳴り声をきっかけにそれは止まつた。そしてその部屋に集められた八人の子供たちは驚愕した。さつきまで死んだていたと思つていた少女がいつのまにか起き上がり、不機嫌そうにしながら怒鳴つたのだ。

あまりにもの大聲で身体がびくりと震え、そしてその少女を見て死人が生き返つたと思つてさらに恐怖にかられた。

だからああ言つてしまつたのも悪くはないだろう。不機嫌そうにしながら蒼い髪を靡かせる少女に惡意があつたわけではなかつたのだから。

「せつかく気持ちよく眠つてたのに、こんなに騒がれたら眠れないじやない！」

きつと今の少女の言葉に全員思つただろう。いや、あんた死んでたじやん？つか眠つてたつて、寝息すらしていなかつたんだけど。だけどどうやら少女はただ寝ていただけだつたのだ。勘違ひしていたのは子供たちだつた。

そして子供たちには一陣の光明が見えていた。今だ、少女は不機嫌そうにしているがこの少女は初めからこの部屋にいたのだ。誰よりも早く、だからこそ期待できる。この状況をどうにか打破できるのではないかと。

「……あなたはなんでここにいるの？」

だから勇気をふりしほつて少女に話しかけたこの短髪の少女は実に素晴らしいだろう。びくびくと少女に怯えながらも少女は言つたのだ。

「なんでここにいるか？そんなの……気付いたらここにいただけだけど？」

質問の意味をまず理解していなかつた蒼い髪の少女。彼女はただそう答えただけだが、他の子供たちにとつて、それは絶望と同期だつた。

自身の言葉にがつくりと頭を垂れる少年少女たちに少し疎外感を覚えるが、まさか自分の言葉で少年少女たちを新たに絶望の淵へと立たせたことは露には思わないだろう。

「もう嫌だ！なんだつていうだ、いつたぼくたちがなにをしたつていうんだよ！」

落ち込んだと思つたら急に叫びだす一人の少年に蒼い髪の少女はびっくりと身体を震わせて驚くが、この場の状況を理解していない少女からしたらその言動じたいに文句を言いたい気分になるが、どうやらただならぬ雰囲気に気付いたのかとりあえず押し黙つておくことにした。

「まあとりあえず落ち着こうよ少年」

「うるさい役立たずっ！」

とりあえず状況を知ることが大事だと思い至つた少女はそう言うが、子供とは感情に

左右される非常に危うい存在である。唯一の希望がなくなつた今、少年の心は限界まで達していた。

「役立たずつて……なにもそこまで言わなくてよくない？」

言葉とは人の知らぬうちに凶器という名のナイフになるものだ。別段と傷つかないわけとは言わないが名も知らぬ子供に急に役立たずと言われればそそこのショックは受けるだろう。

「もう嫌だ！パパとママに会いたいよつ……！」

何十時間という時間をこの何もない部屋で過ごした少年のただひとつと思いつた。それはこの少年だけの思いではないだろう。蒼い髪の少女以外誰もがそう思つてゐるのだろうが誰もそんなことは口にしない。口にしたことではそれが現実になることがないということがわかりきつていたことだから。たかだか五六歳にも満たない少年少女たちにこの状況というのは苦しいものなのだ。

「つと言われてもな……出たいならドアから出たらいいじゃん？」

誰もが思う素朴な疑問だろう。だがこの場では蒼い髪の少女を除いて誰もが知つている問題だ。答えは簡単なのだ。

「…………ない」

「え？」

「開かないんだよ!! 鍵が閉まつてて開かないんだよ!」

「マジ…?」

さすがにこれを聞いて冷静になれるほど少女は大人でもなかつた。

「あなたが寝ていた時からずつとわたしたちはここに閉じ込められているの……」

話しかけてくるのは先ほど勇気を振り絞つた短髪の少女だつた。いくらかか落ち着いたのかその言動は先ほどとは違いしつかりと芯が通つていた。のだがやはり少し落ち込み氣味に話す少女の話し声は小さく暗い声だつた。

納得がいつたと思つた。なぜ少年少女たちが自身の言葉で落ち込むのかも、なぜ少年が自分を役立たずと言つたのも。この子供たちは最初からこの部屋に君臨していた自分に期待を寄せていたのだ。

そして少女は

「わかった。この部屋から出たいんだな。だつたら俺（わたし）がそれを叶えて上げよう」

絶望して泣き叫ぶ子供たちを放つておくほど子供でもなかつたのだ。

まず一に身代金目的の誘拐の可能性は低かつた。それもこの場にいる子のほとんどがゴミだらけの街の出身だつたために金銭目的だということがありえないのだ。それに半数は孤児だという。

だつたらなぜこの部屋に子供が集められたのか。有力事項は実験と言う言葉だつた。転生する前は比較的安全な世界に暮らしていた蒼い髪の少女にとつて実に縁のない言葉だと思つたりはしたが、スラムなどある世界のこの場だ。ないというわけではないのだろう。

「このことに関してリリはどう思う？」

泣き叫ぶ少年をなんとか宥めることに成功し、とりあえずはこの状況をどうにかしようということで落ち着いたりはしたが案はでていなかつたりする。だからこそ蒼い髪の少女は自身の近くにいた短髪の少女リリへと案を求めた。

「どう思うつて言われても……なにも思いつかないよ。部屋には何も置いてないしドアは堅いし、わたしたち子供の力じやどうにもできないんじやないかな？」

「うーん……それを言われちゃあねー、確かに皆でドアに体当たりしたところで開くわけもないしね。だけどこのままの状況ですつといられるほどにわたしたちは強くないよ」実際にさきほど一人の少年が感情を顕わにして暴走したのだから、そのうち二人目、

三人目と出てくるだろう。そうなる前になんとかしないといけないというわけであるが、どうにも少女には考えがつかなかつた。

「こんな時『魔法』とかあればいいのになー……」

その言葉に反応したのはなにもリリだけではなかつた。この場にいる少年少女全員が蒼い髪の少女へと視線を向けたのだ。

「あなた魔法が使えるの？」

急な行動に少女はたじろぐが、リリの言葉に少女は違和感を覚えた。“使えるの”。

その言葉ではまるで魔法があるみたいな言葉だ。

「え!? えっと……使えないと？」

なぜか疑問形になつたのはしようがないだろう。そしてその一言でまた子供たちは落ち込むのだった。だが今回はそこまで酷くない。まるで当たり前だと言うふうかに、少し期待しただけだったようだ。

「そうよね。このスラム世界で魔法なんて高貴なもの使えるわけないわよね……。素質があつたとしても誰も教えてくれる人なんていないもの」

確定だつた。魔法は実在した。この世界に置いて魔法ほどマイナーのものはないだろうというほどに魔法は存在していたのだ。そして少女は感じた。自分に語りかける存在を。

『さあ自覚しなよ。君は神の卵。君には覚醒してもらわないと僕の立つ瀬がない。溢れてくるだろ身体の内側からじわじわとまるで不思議なほどにさあ！それこそが魔力！それこそが魔法！それこそが君の固有技能（バトル・アーツ）！さあ壁はすぐそこだ。ぶち壊せ！』

ふらふらと身体が勝手に動いた。まるでそれが当たり前かのように、ゆらりとうごめく少女に驚いたりりはどこに行くのかと声をかけようとしたがそれはできなかつた。なぜなら少女から溢れ出る蒼いオーラのようなものに気圧されたから。

来たのは堅く閉ざされた扉の前だつた。殴つたりと蹴つたりとしたようで、扉はそこそこ傷ついていた。だけど壊れているようには見えない。罪人を閉じ込める牢獄の牢かのようには強く閉ざされたまま。

『使い方はわかるだろ？簡単なことだ。ただ形にすればいい。思うままに魔力に形を与えるといいよ』

ゆらりと蒼いオーラが蠢いた。そして少女はゆっくりと右腕を振り上げた。そして少女の口オーバードラップがその魔法の言葉をただ小さく。だがはつきりと響くように紡いだ。

「魔力充填」

轟と少女を中心に風が吹きあふれた。窓もない閉じられた密室に風が吹き荒れた。少女を見ていた子供たちは咄嗟に目を瞑つた。そして風が止むと同時に目を開けたそ

こにはキラキラと蒼に輝く少女がただ一人。閉ざされた扉へと拳を振り下ろした。ズドンとまるで大砲のような音を響かせた少女の拳だがそれでも扉が開くことはなかつた。だがそれでも少女は諦めなかつた。ズンズンと音を打ち鳴らしながらただ殴つた。

そして赤が中を舞つた。気付いたのはリリだけではなかつた。その場にいた少年少女全員が少女の手が、その拳が、赤に塗れていたことに誰もが気付いた。期待していた。あの少女がこの閉ざされた扉を開くことを、彼女ならやつてくれると、あおの蒼いオーラを見たときに思つてしまつた。

だけどすぐにそれは後悔へと変わつたのだ。なぜ止めなかつたのかリリは自身を叱咤した。自分たちも“やつた”のだからわかるはずだつた。あの扉の堅さが尋常ではないことに。一見木製かのようには見えるが、触つた感触はまるで鋼鉄。堅さもまたそれ以上だらうことは子供なりにわかつていたことだつた。

そんなものを本気で殴つて無事ですむわけがないのも。

「やめてっ！」

悲痛な叫びだつた。リリだけではなかつた。その場にいる全員がそう叫んだのだ。だが少女は止まらなかつた。少女は止まれなかつた。気付いたのだ。気付いてしまつたのだ。このままだと訪れる一つの恐怖に。一度体験してしまつたからこそ思えてし

もうそのことに。

「君は死を恐れるのかい？生にしがみつくと言ふのかい？それが人間の傲慢でも……そんなこと知るか。わたしはただ生きたいだけだ。死を知らない奴にはわからぬんだろうけどなっ！」

『そうだね理解したくないし、理解しようとしないよ。だつて僕神様だし』

「生き返つてすぐ帰るつてのもわたしは遠慮したいんでね！せめて今度は寿命まで真つ当したいね！そう思うのも悪くはないだろう？」

『さあね。』
僕にはわからないよ神様だけど』

「だから……ぶ、ち、ぬ、けええええええええええつつつ!!」

この閉じられた部屋で

息も絶え絶えにしながら少女は肩を揺らす。今まで生きてた中で最高に最強な自身の拳は目の前に立ちふさがる壁を打ち壊すことに見事に成功したのだ。だけど払った代償は大きかつた。両手は鋼鉄以上に堅い扉を殴り続け、すでにボロボロ。

手の皮膚はズル剥け、骨が見える部分もそこそこ、真っ赤な紅い血に塗れた両手を見てやつと少女の肉体は自覚した。

「つづく!?」

そう、信じられないような痛みが少女を襲つたのだ。ボタボタと零の様に零れ落ちてく紅い零はこれでもかというように足下に水溜りを作り、少女は自身がどれだけの血を流したのかも理解した。死んでいてもおかしくはなかつた。今だ両手が原型を残してすることが不思議なことだつたのだ。

だけどその代償に少女たちは解放されたのだ。この閉じられた世界へやから。

「つと、……やつてられない！けどまあわたし頑張つた」

そう振り返りながら笑顔でいう少女の顔は今にも倒れそうなほど青かつた。

「じゃあわたしは行くよ。またね」

少女の後ろにいた少年少女たちがなにか言う前に蒼い髪の少女は真っ赤な両手を滴らせながらその場を離れたのだった。

1

部屋からすぐに離れたのはわけがあった。とても簡単な理由だ。

「まあしようがないとはいってもちょっと傷つくかな」

みんな怯えていたのだ。それはしかたないと言つても堪えるものはある。誰もこんな両手を血塗らせたしかもバカみたいな怪力を持つ者に近付きたいという者はいないだろう。いつその力が自分に振られるか恐ろしくてたまつたものではないだろう。

「血も止まつてきたか」

すでに両手から出る紅い零も止まり、ズル剥けてた皮さえも治り始めていた。人とは思えないほどの治癒力に化物じみた怪力。自身がどれほど人間から遠ざかつてしまつたのかと少女は一人悪態をついた。

そしてこのかけりなく続く廊下に悪態をつきたくなつてきただところだった。すでに

部屋から出て数十分は経っているというのに、歩けど歩けど見えるのは薄暗い廊下のみ、窓もない。扉も何も見当たらない。在るのは左右にある壁と廊下のみ。

「もう勘弁してよ……」

數十分とはいって、血を流しながらこの薄暗い廊下を歩き続けければ気力もなくなつてしまふのも無理はない。気力どころか体力も残つてゐるかどうかになつていた。

肉体の疲労に後押しされて、その場にしゃがみ込む少女。疲労と同時に長く続く廊下を歩き続けたがために、精神が参つてしまいそうになつっていた。

「手が潰れてもいいから壁を殴り壊そうかな……？」

歩くと言う選択肢が抜け落ちるぐらいに少女は参つていた。しかし、灰色で塗りたくられた壁はどうみてもコンクリート、またはそれに似た素材で作られたそれは、いくら怪力であろうと手が潰れる程度の犠牲ではすみそうにはないだろう。

「さすがにそれは意味がないことがら止めてほしいかな？だつてここは地下だし、いくら壁を壊して進んだところで出口には出られないんだよ」

不意に少女の耳へと聞こえた声。俯かせていた顔を上げれば、そこには白衣を着た一人の青年がいた。

「やあやあ。初めましてだね？お初に目にかかるよ被験体さん、僕はしがない科学者だよ」

ニコニコとまるで優しそうな笑顔を見せながら青年は少女にそう名乗った。笑顔によつて細められた目にかかる紫色の髪を鬱陶しそうにしながら青年は少女にそう名乗つた。

「科学者……？ つてことは」

「そう。君たちをあの部屋に閉じ込めたのは僕たちがしたことだね。だが、勘違いしないでくれよ？ なにも理由なく閉じ込めたわけじゃないんだね」

ただ実験をするために君たちを集めただよと続ける科学者に少女は怒りを感じるしかなかつた。だが、それと同時に少女は科学者に恐怖を実らせた。実験をするためにと言つた青年が少女を見る目はまるで“物”を見る様な視線だつた。

「いや、しかし君は素晴らしいね。その力……ぜひ研究させて欲しいかな？ どうだい。給金は弾むけど？」

「つ……断じてお断りよ！」

「えー残念だなー。君と僕とならまた新たなステージへと登れるとと思うんだけどなあー」

ニコニコと見てゐる者を嫌悪させるような青年の笑顔が怖くて溜まらなかつた。まるで残念そうにしていないその口ぶりも少女を畏怖させるには充分だと言えた。
「痛くないよ？ 痛いのは最初だけだからさあー。だから君を調べさせてくれないかなー

？」

「痛い、痛くないの前に！……わたしはあなたみたいな下種の道具になるつもりはないんだけど」

「……もつたいないなー。もつたない。科学の発展とは常に犠牲は付き物だよ？嫌がつてたら何も進展はしないんだ」

両手を広げて少女へと迫る青年。

「ここは僕を助けると思つて実験体どうぐになつてくれないかなー？」

「来るなっ!?わたしに近付くな変態どうぐつ！」

後ずさりながら青年へと罵声を上げるが青年は氣にもしない。依然変わらず、少女へと迫つていた。青年から発せられる嫌悪感と恐怖感に肉体がついていけなつた。まつたく少女の身体は少女の言うことを聞こうとしなかつた。立つて逃げることすら困難になつていたのだ。

「無駄だよ。君は抵抗できずにここで僕の実験体どうぐになるんだ。それはもう決まったことさ。神様に祈ろうが、悪魔に願おうがこれは決して崩されることはないんだ。だから諦めなよ。どうしてそんなに意地を張るんだい。実験だつて痛いことばかりじゃないよ？苦しいことばかりじゃないよ？……それはもちろんそういうことが多いのかもしけないけど、きっと楽したことだつてあるよ。君はまだしてもいいことになぜそう嫌がる

なんだい？せめて一度実験考えてほしいやつてみてからなど僕は思うのだけれど……君はそこに関してどう思うのかな？」

無理だつた。限界だつた。怖かつた。気持ち悪かつた。この青年が、科学者が、目の前でニコニコとまるで子供受けしそうな笑顔をする人間が……。彼は、青年は、男は、人間は、まるで化物のよう^{ニシゲン}に見えて堪らなかつた。

身体が震えていた。涙が出そだつた。青年の手が少女の腕へと伸びた。だけどそれは

「わ……たし……に、触れるなあああ！！」

少女を掴まなかつた。青年の手を払うように振られた少女の腕は青年の手を“すり抜けて”いき、止まらない腕の勢いに身体が引っ張られ、少女はその場に倒れるようにな伏せた。

「えつ？」

「あちやー……」

あまりにものできごとに理解が追いつかない少女だが、その疑問は青年が答えることになる。

「バレたから言うけど、実は君の目の前にいる僕ってただのホログラムの塊なんだよねー」

けらけらとまるで少女を嘲笑うかのように言う青年は続ける。

「まあ例え地下に**ここにくたい**実体はなくとも地上**でぐち**には僕の本体があるからね。君は決して逃げられないよ？いや、逃がしはしないよ」

「……黙れ」

「もう君は僕の術中のなかだ。つまりは籠の鳥。わかる？今の君の状態がどういうふうになつてゐるかが。君の頭にはたーーつぶりと僕の恐怖がさあ、**インプット**入力されているのさ」「わたしの目の前から消えろおお！」

立ち上がり、振るう拳が青年のホログラムを貫く。ただの映像だというのならすでに恐怖はない。ただ見ているだけでおぞましいその笑顔が少女の目の前にあるだけだ。そう自身を思いあがらせながら、少女は拳を振るつたのだ。

「あらら。まあこのまま君をここに放置しておくわけにはいかないからね。地上へと繋がる回廊を開けてあげるよ。ほら、君のすぐよこに」

青年の口元を拳が通過する。そして霧散するホログラム。少女は顔色を青くさせながらも、がちんと鍵があくように開いていく壁の一部を見たのだつた。

そこにはまた一つの通路があつた。また歩くのかと、気分が落ちそくなつた少女だが、あの青年がなにか用意している可能性がないこともないと仮定して慎重にその通路のなかを歩きだした。

だが今度はそう時間がかかるなかつたと言えるだろう。数分もしないうちに通路の終わりが見えたのだ。少女の身体よりでかい木製で作られたであろう両開きの扉。ドアノブではなく取っ手が付けられており、引いて開く形になつてゐる。

ごくりと粒を飲み込みながら少女はこの先に待ち受けるものを想像する。もしかしたらなにもないかも知れない。青年が扉を開けてすぐそこに待ち受けているのかもしれない。ただ地上へでる階段が永遠と続いているのかもしれない。少女を捕えるために派遣された人々が待ち受けてるのかもしれない。考えれば考えるほど少女に不安が募る。

だけどいつまでも取っ手に手をかけているだけのままでは進まないのもまた事実で、このままあの青年に好きに弄ばれるのも少女にとつて勘弁……つまりいいかげんにしてほしいといったところ。

なにが待ち受けていようとただその力を持つて進むだけだと己を勇気づけた少女は
思いきつて両扉の扉を引いた。

そこには

「ふむ……、遅かつたな。では始めようではないか」

ごつごつとした真黒な西洋騎士を思わせるような鎧を着た一人の男が、その手に剣を持ちながら待っていたのだ。

「いや、無理じやないこれ？」

少女に素手で刃物に勝てる自身などこれっぽちも存在していなかつた。



不可不思議な弾丸が少女の視界で飛び舞う。少女がそれを避けるたびに削られる床や壁を見て、当たればただすまなくなりそうなことは充分に承知だつた。

真つ赤な血の色を象つたような赤い弾丸に少し気後れしながらも、少女は走つた。この端から端まで合わせて五十メートル以上はありそうな部屋のようなエレベータのよ

うな空間を。

「どうしたつ。避けるだけでは意味がなかろう！」

「んなこと言われたつて……」

正直言つて少女は泣きたくなつていた。相手はその手に持つ剣に加えて、不可不思議な力を使うのだ。力についてはなんとなく少女には答えがわかつてはいたが、それでもすぐにそれを攻略できるかと言われてできるわけもなく、絶賛少女は非常にピンチだつた。

男の眼前に回る赤い三角形から作られていく弾丸を横に飛び、上に飛び、または前に飛びと。走つて、走つて、走りながら少女はこの打開策を考える。

「……うん。無理だ」

だがそれが出ることはなかつた。

「レギオンつ」

『OK M A S T E R』

下げていた剣を構える男。誰かの名を呼ぶように叫ぶとそれに答えたのは男が持つ剣。

「来ないのならば……」ちらからいかせてもらうまでだつ！」

『S O N I C M O V E』

剣が言う。それだけで男は走る少女の視界から消えた。後に残るは、少女に向かう深紅の弾丸のみ。

「疾風……一閃っ！」

『SONIC BLADE』

背後から振りかかる銀色の刃。触れるものすべて断つ音速の刃は背後から少女へと振り下ろされた。

「速っ!?」

前は弾丸、後ろは刃、左右も弾丸。少女に逃げる道などなかつた。そう。少女が“覚醒”していなかつたら。

男も気づいた。少女から立ち上つた蒼い魔力オーラに。だがそれだけで刃は止まることなどないのだ。実際にそうだろう。だが魔力が形を成してしまえばそれは別なのだろう。そう。男が放つ深紅の弾丸のようだ。

「ハンドソニックっ！」

少女の右手に形成された蒼で塗りたくられた人振りの短剣。手首から伸びたそれは振り下ろされた銀色の刃を防ぎ、そして少女は続ける。

「ディレイ！」

男の剣を受け止めた少女はそのまままるでステップを踏むようにタタンとリズミカ

ルに地面を何度も蹴った。ただそれだけで少女は男の視界に残存を残して弾丸の包囲網から抜けたのだ。

「……ほう」

男の唇がニヤリと釣りあがつた。しかし男が放つた深紅の弾丸は少女ではなく少女の残残を貫いて男へと牙を向けるのだ。

だが

『PROTECTION』

それは弾丸と同じく深紅の壁によつて防がれる。

「うそつ!? それずるくない?!」

「ズルなどではない。楯の魔法を持たぬ貴様が悪かろう」

漆黒の鎧に傷一つ付けずに男は弾丸の雨から生還した。どことなく少女が見れば、その顔は唇が釣り上がり、なにが嬉しいのか見るものをどこか笑つているように錯覚される。

「そういえばまた名乗つていなかつたな。それがしはセルゲイ。セルゲイ・オクトリオ。なに……しがない傭兵だ」

「わたしは……フェル。フェル・アフシル。しがない孤兎をやつてゐるわ」

その名乗りに満足そうに顔を綻ばせて男、セルゲイは己が剣。レギオンを突きだすよ

うに構えた。そして少女フェルはセルゲイの剣をいつでも対応できるように眼をこちらに形成された短剣はそのままにフェルはただ次に来るであろう剣戟に備えた。

1

最初に動いたのは言わずもがなセルゲイだ。

『SONIC MOVE』

無機質ながらどこか深みのある男の声を発する剣がそう唱えると同時にセルゲイは地面を蹴る。ただそれだけでフェルの視線が追いつけないような速度を出して肉薄する。

「見えないなら……」

だがフェルは無謀にも視界を頼ることを止めた。どう眼を凝らしても見ようが見えないものは見えないのだ。それならそうでフェルにはフェルなりのやりかたがある。だからこそフェルは眼を頼ることを止めた。

「それはそれでやりかたがあるよね？」

刹那、フェルはタタンと軽くステップを踏んだ。そしてフェルの眼前からレギオンを振り下ろすセルゲイ。

「最初から来るのはわかってるんだから……」

だがその刃はただフェルの残像を通過したに過ぎなかつた。

「残像^{わな}残して待つてればいいじゃない？」

セルゲイの背後から手首から伸びた蒼の短剣を振りかぶる。セルゲイは大振りした後で、その背中は隙だらけだ、深手は負わせられないとしてもそれなりのダメージは与えれるだろうと踏んでの行動だ。

玄人であるセルゲイに勝てる見込みなどフェルには端からなかつたと言つていいだろう。だがそれでも鼻つぱしをおかせることぐらいはできるだろう。だからこそこの初手。

なんとかして攻撃を与えるところだつた。

「惜しいな。真に惜しい……もう少し実戦経験があればそれなりのいい勝負ができたのかもしけん。だがそれがしも仕事でな。そもそもやられてはいかんのだよ……」

だがこの玄人はそれさらさせてはくれないようだつた。

振り下ろした短剣が弾かれる。何事かと見ればセルゲイは剣を振り下ろしたままそのまま回転切りの容量で背後に即座に振りかえつたのだ。短剣を弾いた。セルゲイの

剣から深紅のオーラが纏われ、その言葉を紡いだ。

「疾風……」

『SONIC BLADE』

「一閃！」

それは必殺の一撃。当てれば必ず相手を殺す滅びの刃。だが言いかえればそれを外せば自身に大きな隙を作らせる諸刃の剣なのだ。

振り下ろされる刃を見てニヤリと笑つたのはセルゲイではなく、彼 フエルなのだ。

「かかった！スキル……ディストーション！」

空間が歪む。フェルの眼前を対象とした空間が揺らぐように、まるで波で荒れる海のように揺らいだのだ。

「なんとつ？」

セルゲイは理解した。罠にかかったのは自分だつたと。初手を意識しすぎて二手目を意識しなさすぎたのが敗因だつたのだろう。それは玄人『せんし』としてあるまじき事態だというのに。ここが戦場ならセルゲイはとっくに殺されているとまではいかないが追い詰められたネズミほど恐い物はないというのだろう。

よく言うのである。窮鼠、猫を噛む……と。

揺らいだ空間にあわせるように剣の軌道は変わる。波に流される水のように。その
切つ先はすでにフェルを捉えていない。

「少しは痛いどころか済みそうじゃないんだろうけど、セルゲイは鎧があるし、大人だか
ら大丈夫だよね？」

少女はそういう弾き上げれていたその手をぐつと強く……握りしめた。

〔魔力解放……〕
〔オーバードライブ〕

〔我感服せし……か〕

〔これがわたしの全力全開つ！〕

フェルの右手に取り巻くように蒼色の魔力が渦巻いた。そしてそれは
「ぶ・ち・ぬ・けえええええっつ!!」

拳と供にセルゲイの肉体を撃ち抜いたのだ。

蒼い奔流がセルゲイを貫き、鋼すら打ち壊す拳がセルゲイの漆黒の鎧を砕き、彼の意
識を刈り取った。

〔つは、は……はつ〕

肩を落とし胸を前後させる少女、フェルの目の前には腹の部分が砕けた黒い、漆黒の
鎧を着る男が一人。その手に容易く人の命を奪つてしまふ剣という武器を持ちながら
も男はその場に仰向けに倒れて

いた。意識はないのだろう。瞼は閉じられていて、起き上がる気配もなく、例え瞼が開いていたとしてもそこにあるのは白目をむいた瞳だけなのだろう。

「うん。わたし頑張った……！」

顔に大量の汗を滲ませながらも少女は両手を上げてガツツポーズ。すなわちぐつと掌を握りしめた。この勝利を噛み締めるために。

そこはゴミだめの街

あの白衣を着た青年が贈つたであろう刺客、まるで西洋騎士のようなものを連想させる恰好をした傭兵セルゲイを倒したフェル。だがその状態は芳しくなかつた。

そもそも今のフェルの状態は少しばかり危ないのだ。部屋から脱出するためだつたとはいえ、手を犠牲にして鋼鉄の扉を打ち破り、大量の出血をするはめにあつた。失った血液がたつた数十分ほどで回復するほどフェルの身体は人間離れしてはいられない。

いくら化物じみた怪力があつたところで、所詮は十にも満たない年端もいかない少女であるフェルにとつてそれは痛手すぎた。さらに傭兵として玄人な戦士セルゲイとの戦い。これもまたフェルには重すぎた事。

半ば無理矢理に近い形で初めて全力で魔力を放出したフェルの身体は限界に近かつたのだ。

「もうヘトヘトだよ……」

意識を失つて倒れたセルゲイと倒れるようにその場に座り込むフェルを“運ぶ”部屋。どうやらこの部屋は内部は少しだけ広い部屋のように見えるがエレベータでもあるようで、セルゲイが倒れて少してから急に動き出したのだ。

ゼエはあと顔色を蒼くさせながら息をするフェルはこれの行き先が不安でしたからつた。行きつく先はきっと地上でぐちなのだろうが、それはここにセルゲイがいたところからそう予想したがあながち間違つてはいないのだろう。だがそこからが問題なのだ。

そこに待ち受けると予想させるあの科学者かがんたい。

「戦いに夢中で忘れてたけど、あれに会うのだけは勘弁してほしいわ……」

あれは怖い。まともではない。人間ではない。会えば途端に少女は恐怖で動けなくなるのだろう。例え全快の状態でも会うのだけははつきりといって拒否したいところであるが今のこの状況でそれは難しいのだろう。

例え宇宙がひっくり返ろうが青年の実験体などになるつもりなどフェルには微塵もないが、青年と直面すればそもそもいかなくなるのだろう。動けなくなつた自分をただ捕縛するだけで事は済むのだから。

「なんとかしないと……」

そうは言うがなにも案でないのもまた事実であつた。

1

大きな音を鳴らしながら部屋の動きが止まつた。この広い空間で上に上がつていく

という奇妙な浮遊感がフエルの体調に拍車をかけていた。調子は悪くなつていく一方。だが嘆く暇も用意されていないという鬼畜仕様である。

部屋が昇っている間はずつと座つていたために消費された体力と気力は幾分かと回復はしたがそれも焼け石に水にすぎない状態。

セルゲイほどとまではいわないが敵が迫ればすぐに捕縛されてしまうのだろう。

「なに……？」

部屋の扉を開けた先は誰もいなかつた。待ち伏せしてゐるであろうと踏んでいた青年も、敵も、誰も、だ。そこに広がるのは人間の子供程度なら収まつてしまいそうな培容器（カプセル）と、電源が切られて画面が真っ暗なパソコンと思わしきものが数代。床に散らばるはなにか重要そうな書類だがフエルがそれを手にとつて見てみようがあいにくこの世界の字が読めずになにが書いてあるのかがわかることができない。

「誰も……いないの？」

今だ電気がついてることから少し前までは人がいたのだろう。投げ出されたように置かれてる回転する椅子や床に散らばる書類を踏み荒らした後からもそれが窺える。だとしたらここにいた人たちはどうに消えたのか。

答えはでることがない。ただ言えるのはこの部屋にいたところでわかることもわからないということだけである。だから意を決してフエルは今だ異様な空気を孕んだこ

の部屋から出ることにした。ただ単になんとなくこの部屋からでていきたいという理由もあつたのだが。

「誰も……いない」

一通り中を探索はしたがどこも似たような状況のまま放置されていた。フェルが最初に出た部屋のような場所が何か所があり、そこも書類が散乱して、パソコンの電源は落とされている。

明らかにおかしかつた。どうして誰もいないのだろうか。こうまで誰もないと逆に不安になつてしまふものだ。自分を捕えると豪語までしていたあの青年すらないないというのもおかしなことだ。

ここはいないとわかつてほつと安心するところではあるのだが、こう不安な事態にまでなつてくると逆に不気味なだけであり。

「いったいなんなのよ……」

逆に恐怖が募るものだ。

「まあいいや。さつさとここから出よつと
「どこに行くのかな?」

それは不意打ちに近かつた。最も危惧していたことだというのにフェルは油断していた。全体を調べたことにより決めつけてしまつたのだ。

「ふふふ。本体で会うのは初めてだね？ フエル・アフシル」

つい前に聞いたこの声。フエルの顔に嫌な汗がジワリジワリと流れ落ち、フエルは後ろに振りかえった。

「まさか彼（セルゲイ）を倒すなんて思いもしなかったよ。だけどそれこそ僕も君を調べがいがあるつてものだ。喜ぶといいよ？ 僕の君への興味は一段と上がったのだから！」相も変わらずニコニコと気味の悪い笑顔で話す青年にフエルは舌うちしたい気分である。フエルにとつて青年に興味を持たれたところでただたんに最悪としか言いようのない出来事。

「なんであんただけがここにいるのよ……」

本当に最悪としか言いようがなかつた。誰もいないこの通路の真ん中で青年（へんたい）に出会つてしまつた自身の不幸を呪つてしまいたいほどに。

「いやいや、まさかだつたんだよー」

そう話す青年はなにか楽しげだつた。

「まさか誰もが君が彼を倒すなんて思つてなかつたんだろうね。この僕もすこし驚いてしまつたからね。この研究所に置いてあつた手札は彼のみ。彼が倒れたとなるとこんな野蛮で危険な場所でおちおちよ研究すらできないから、ここは破棄されることが決まつたんだよ」

至極簡単なことだつたのだろう。しかしこう立派とは言わないが重要な見えてる研究所に用心棒が一人だけと言うのもなにか変な感じはするが、セルゲイがそれほど優秀であつたという証拠でもあるのだ。それを隙をついたとはいへフエルは打ち負かしたのだ。

ゴミだめの街^{ゴミダメノシタ}という危険性の含んだ街と、優秀な用心棒を倒した存在がそばにあるというだけで落ち着いて研究ができるわけがないといったところなのだろう。「だから今回は君を回収できそうにない」というのが僕にとつては非常に残念だ。本当ならね。本当なら今すぐにでも君の両手両足を縛つて連れていきたいところだけど僕はセルゲイを回収しないといけないからね」

ほつとする。青年のその言葉にフエルは安心したが同時に本当にその目的だけでこの青年がこの場にいるのかが信じられなかつた。

「本当だよ？僕の内方魔力量は少ないからね」。そう一日に何度も次元転送魔法は使えないんだよね」

残念だというふうに青年は言う。次元転送魔法とやらがフエルにはなにかわからなかつたが青年がみせる表情からは“今”ここでフエルを連れていくことができないことが事実なのはわかつたのだ。

だがそれは

「まあでもさ……」

青年の手が少女フェルへと伸びて行く。それにびくりと身体を震わしたフェルは即座にその魔の手から逃れようと飛びのいたが、それでもまるでついてくるような悪寒。後ろの首筋に誰かが触れたような感触に気付き、背後に振りかえれば

「え……？」

紫色の色の三角形型の魔法陣から出た一本の腕。

「だからと言つて僕が君をすんなりとここで逃がすわけがあると思うかな？」

フェルはその奇妙な光景に呆気にとられた。少女の目の前にあるのは一本の腕だ。その先にはなにもない、しいて言えば紫色の魔法陣があるだけでそれ以外にはなにもない。例えこの世界に魔法というものが存在していて、つい先ほどその力を盛大に振るつて戦つた騎士のような傭兵はいたが、それでもこれはまだ少女にはきついことだ。

それは“理解できない”。まるでロボットがよくあるようにロケットパンチを怪獣に撃つように、そんな軽々と自身の腕をまるでそうであることがあたりまえかのように離されたら、そこに浮かぶのは未知への恐怖というものだ。

「うん？……ああ。これが不思議なのかい？なに、簡単なことだといいたいところなんだけど、これは少し企業秘密でね。多分……僕以外は使い手というか、これの術式構成を理解できる人はいないと思うのだけどね」

青年の独白は続く。フェルがなにも答えようが、答えなくとも。

「まあ僕の話はいいから、まあ先に言つた通りに僕は今君を連れていくことはできないんだよ。ほんとに残念なことにだよ？だけどそれだと君は僕から逃げようとしてきつといろいろな手を尽くして隠れるだろうね。だから保険をかけるんだ。なに、ただ印を君に付けるだけだよ。君がどこにいようと、どの世界にいようと、僕から逃げられないようにするための印をね」

言われてからのフェルの行動は早かつた。今にでも身体に振れそうな青年の腕から離れるために今、自身に残つたなげなしの魔力を使つて床を蹴る。

「速いね。一瞬だけどセルゲイを翻弄せしめただけはあるね……でも」

遅いとでも青年は言つたかったのだろうか。残像を掴んだ腕を即座に元に戻し、青年はフェルを追う。確かにフェルを掴むことはできかつたが、それでも青年はフェルを見失つたわけでもなかつた。

「そこだね」

虚空を掴むように腕を伸ばした。伸ばした腕は紫色の三角形に包まれて消えた。ばかりと誰かが倒れる音が聞こえ、同時に青年は自身の腕が何かを掴んだ感触を得ており、彼はそのまま腕を引く。

ズルズルとなにか引きずるような音とともに青年の腕は徐々に元通りになつていく、

手首が見えたあたりで合わせて小柄な足首が虚空から現れた。そこからさらにズルズルとでてくるのは少女の身体。青年の手に足首を掴まれ宙づりとなつたフエルがそこにいた。

2

「あっさりと捕まつたわたしが言うのもあれだけど、いたいけな少女を宙づりにするつてなはあれじゃない？そこは男としてどうなのかな科学者さん？」

はらりと重力に引かれて落ちそうになる布切れを押さえながら少女は青年を見上げて言う。

「僕は子供を愛てる趣味なんてないんだけどね。実験体を愛てる趣味はあるけど」

にやりとフエルを見る青年につまりそれは結構やばいのではないかと少女は思った。

この青年は実験体であればなんでもいいのだ。幼児だろうが、少年であろうが少女であろうが、大人であろうが……あげていつたらキリがなくなるのだろう。結論的にいえば青年は変態かがくしやの中のさらに一際危ない変態かがくしや。

「印を付けるわけだけど、なに。痛くないよ？」

「そこはかとなく疑問形なのが怪しいんですが？まあと言つても今のわたしに拒否権はないのでしょうか？」

「そうだね……あつたとしても言葉だけのそれでどうやつて僕を止めれると思う？そもそも君がここに来た時から、そんなのものはないに等しいわけなんだけどさ」

ぶらりぶらりと釣りあげられて揺れる身体を止めてフェルは自分の足を掴む青年の右腕を見る。真っ白なゴム手袋を付けたそれは実に滑りが悪そうで、握力がなくなる以外で青年が手を離すことがないように思える。

掴まれている足と逆の足を使ってどうにかできないものかと考えたが、残った足でできることといえば、隙を見て青年の身体を蹴るぐらいしかできないのだろう。手は論外と言える。離せば見えてしまう。元が男だつたとしてもフェルは今は女だ。女性だ。少女だ。いくら子供のものといえど、異性に＜rb＞乙女の秘密の花園（したぎ）を見せるわけにはいかない。いや、見せてはいけない

「さて、では事を行うとしようかな」

青年の左手から紫色の光が燈る。魔法陣こそ展開されていないが、それの意図はフェルもわかつた。彼はただ魔力をフェルに埋め込むだけ。それだけ。だがそれだけでフェルはこの青年から逃げれなくなる。魔力は発信機。この世に幾重と生まれてくる人間にただ一人たりと、同じ性質を持つ魔力を持つ者はいない。—魔力＜／rb＞＜

「rp>（＼＼rp>＼rt>）はつしんき＼＼rt>＼rp>）＼＼rp>＼ruby>さえフェルに埋め込んでおけば青年がどこへいこうが、フェルがどこへ逃げようが何年経とうが、青年がフェルを見失うことはない。

ぐいっとフェルの身体がさらに上へと持ち上げられた。逆様になつたフェルの目線と青年の目線が対となつて重なり、毒を纏つたような紫色の毒々しい青年の左手がフェルの胸元へと打ち込まれた。

「つあぐう!?

「ああ、ごめんよ。痛かつたかい?でもこれで安心だ。種は埋め込まれた。君はもう僕からは逃げれないんだ、永遠に。そうだね……逃げ伸びる手段を一つ上げるとすれば、それは僕を……ふふふ。まあそんなことは賢い君には言わなくともわかるのだろうね」

青年は掴んでいた足を離し痛みに苦しむフェルを一瞥すると、楽しそうに笑つた。嗤つた。晒つた。楽しそうに、愉しそうに。そこに他人を心配するなど敬うなどといった感情はない。ただ、彼は自分がよければいい。自分だけがよければいい。

焼けるように痛む身体に悶えながら青年を見てたフェルはそう思つた。胸元が熱かつた。入りこんできた異物に身体がなんとか排除しようと動くが、どうにもできそうになかった。

「そうだ、教えとくね。僕の名前はベルフェゴーれ。科学者ベルフェゴーれ」

「ベル、フェ……ゴーレ」

痛みに悶えながら息絶え絶えに言うフェルに満足がいったのかベルフェゴーレは少女に笑みを浮かべて続けた。

「そう。天才科学者ベルフェゴーレさ。いや、本当に残念だ。君を次の機会に回さないといけないことが、でも。その時は君を捕まえてホルマリン漬けにしてばらして、解剖して、薬物を投入して、色々してあげるのだから楽しみに待っていてよ。なに、君はもう僕からは逃げれない。逃げられない。それが魔力それがあるかぎり君は僕の探知からは逃れられないのだから」

倒れるフェルを尻目にベルフェゴーレは鍔を返して歩きだす。痛みに意識毛頭としてきていた彼女はベルフェゴーレが完全に見えなくなる前に事切れた。



「起きた？」

眼を覚ませばそこに少し前に見た顔ぶれがあった。短く切りそろえられた黒髪の少

女がリリがフェルの真上から覗くように見ていた。

「ここは……？」

身体を起き上がらせ、かかつて白地の掛け布団がパサリと落ちてく。周りを見渡せばそこにはリリだけではなく地下にいた子供たちが集まつており、起きたフェルに気付いて皆がフェルに注目した。

「……あれ？ なんでわたしこんなとこに……？」

意識が途絶えたのは廊下のど真ん中。去つていく科学者ベルフェゴーレを見ながらフェルは気を失つたはずなのだが、今この場は廊下ではなく見たところ仮眠室なようなどころ。置かれた数個のベットの内の一つにフェルはいた。

「なんであつてそれは倒れているあんたを見て、わたし達が運んだのよ」

すぐ隣のベットに腰掛けながらリリは言う。

「あの部屋から地上まで上がつて来たらそこには誰もいないし、とにかくなにかないか探していたら通路のど真ん中にあんたが倒れてるは、見つけた時には驚いたわよ……」

呆れたように言う彼女に少し苦笑しながらフェルは一言ありがとうとお礼を言いたいところだが、その前に確認したいことがフェルにはあつた。

「それで……誰かいた？」

「全然。人っ子一人も見当たらなかつたわ。あんた以外」

どうやらリリがフェルを見つけたころにはベルフェゴーはセルゲイを連れて立ち去っていたのだろう。地上へ上がる道があのエレベータだけならば、確実にセルゲイには会つていたはずだつたのだから。あれば別の話になるのだが、そこはもういいだろう。あれこれ言う前にフェルはリリにただ一言言わなければ。

「ありがとう」

「別に。それにわたしだけじやないわよあんたを運んだのわ」

「そうだね。その子たちにもお礼いわないと」

その後は……

旅にでます。探さないでください

「リリ。わたし旅に出ようと思うんだ」

「どこか遠い場所を見つめながら言う蒼い髪を長く伸ばした少女フエル。

「なに言ってんの。世迷言言つてる暇があれば働いてほしいわね」

せわしなく手を動かしながらリリは答えた。可愛いピンクのテープがまるで残像を見せるかのように激しく動く手に合わせながら花の形へと姿を変えていく。

「これって、あれだよねリリ？」

「なによ。仕方ないでしょ？　この街にわたしたちのような子供ができるまともな仕事を
なんてあるわけがないでしよう」

口を尖らせながら言うリリにフエルは頭が痛くなる思いでいっぱいだ。なぜなら
フェルもリリ同様さきほどからせわしなく手を動かし続いている。

「内職つてつらいよね……」

「弱音を吐きたいのはわたしよ……」

なぜこんなことをしなくてはならないのだろうか。そんな思いでいっぱいだった。

研究施設ともいえるこのスラムに造られた屋敷は科学者たちが急に逃げたのもあり、電気も食糧も寝室も、人が生きるすべに必要な物がすべて揃っていたと言えるが正直いってスラムで生きていくにここまで厄介になるものだなんてフエルは思いもしなかつた。

食糧があれば同じスラムの放浪者が寄つて多かつてやつてくる。暖かい寝所を求めた放浪者もやってくる。そこに大人も子供も老人も関係はなかつた。皆求めてやつてきた。だけど限りが在るもの、特に食糧などはそうそうやれることはなかつた。寝所も与えてしまえば食糧を与えると動議だ。与えるわけにはいかなかつた。

徒党を組んだ人間は恐ろしい。数の暴力というものは厄介である。しかもこちらは子供だけに対し襲つてくるのはこぞつて大人ばかり。本来ならただ蹂躪されるだけでは終わつたのかもしぬなかつた。だけど、子供たちにはフェルという兵器を持つていた。その他にも施設にあつた武器などを総動員して子供たちは戦つた。戦つた、争つた。

「嫌ならやらなくともいいけど、フェルの今日のご飯は抜きだからね」

「うええ、それ卑怯だよりり……」

「働く者食うべからずつてことよ」

負けたわけではなかつた。しかし勝つたわけでもなかつた。被害は壮大だ。いくらフエルが頑張つたところで、いくら子供たちが頑張つたところで、迫り来る人の大波には適いはしない。ましてや相手は身の丈からすでに違う大人。結果的に施設は半壊、仮眠室など寝所は荒らされなかつたが、置いてあつた食糧などは奪われていつた。残つた食糧も少ない。

「これつてそれなりのお金になるのかなー?」

積み上がつた大量の花たち。ピンクのもあれば黄色のものもある。青も緑も、色とり

どりな花たちがフエルとリリの後ろには積み上げられていた。

「こんだけ作つてもしけたお金にしかなんないわよ」

「これだけ積んでも?」

「そうよ」

「ねえりり。わたし旅に出ようと思うんだけど……」

「あつそう」

泣きたくなる気持ちを抑えてフエルは花を結んでいった。

終わつたのは部屋一室が花で埋まつてしまいそうになつたころだつた。夕飯の時間になつたためにリリを呼びに来た少年が扉を開けた同時に大量の花々が少年に押しつぶしたのをいいきつかけに今日の分を終わらせることにした。

「あれはやりすぎだろ……」

花に押しつぶされてげつそりとした表情の少年ラーグは廊下を移動しながらぶつぶつと文句を言うが、それはリリには聞こえない程度の小さな声。だがフェルは聞こえていたりする。

内職をするのは自分たちが食つていくためであるぶん、たとえそれで被害を喰らつても文句が言いにくいところで、だがそれでも色とりどりなカラフルな花たちに押しつぶされるという恐怖というものは堪えようのないことであつて、進んで内職をしてくれているリリなのだが、それでもラーグが文句を言つてしまふのはしようがないと言つたところなのであるう。

「あー今日の夕飯はどうすんだよ?」

「そんなの残りものを適当にやるに決まつてるでしょ? 最初みたいに豪勢な食事なんてもうできないわよ……」

「それはわかってるけどよおー……」

「そうだね。もつといっぱいご飯食べたいよねー」

フェルが眼を覚ました夜は置いてあつたものを豪勢に使つてパツとまるでパーティでもするよう食事を楽しんだが、それももうすることがないようだ。確かに残つた食糧は少ないし、内職で稼げるものも雀の涙みたいなほどである。九人。これがこの研究施設に住まう住人の数であり、子供の数。

だいたい五六歳のものが多いために皆成長期真っ只中。ちみちみとした量では物足りない。実はいうフェルも少ない食事の量に不満を持っているが、それはしようがないことと理解しているために半ば納得しているが、不満なものは不満なのだ。食えるならたらふく食いたいと思っている。

「腹いっぱい飯食いてーな」

転生して前世の記憶を持つているフェルはそうやつて大人の自尊心を使つてなんか納得することができるが他の子供にはやはり辛いものだ。もともとスラムに住んでいたものが大半を占めるがそれでも一度、満腹まで食べるという行為を知つてしまえば満足できなくなるのも当然。

「ああ、もうつ！わたしだつてお腹いっぱい食べたいわよ！文句いうんだつたらラーグは食べなくていいじやん！」

「な、バカ！誰が食わねえつたよ!? そういうリリこそ、そんなに節約が好きならお前こそ食わなければいいじやねえか！」

「こらこら喧嘩しない……」

皆のリーダなために大人のように振る舞うリリだが、それでも彼女は六歳の少女だ。つまり子供だ。どれだけ大人の振りをしようがリリが子供であることには変わりはない、特にラーグと一緒にいたりすればよく子供らしく喧嘩する。しかしここでとばつちりを良く受けるのが。

「フェルはどつちの味方よ！」

「フェルだつて腹いっぱい食いてえつて言つたじやねえか！」

「えーと……」

フェルである。

「別にわたしはもつと『飯食べたいなー』って言つただけでお腹いっぱいまで食べたいって言つたわけじゃないんだけど……」

「もつとも腹いっぱいもかわんねえよ！」

「そうよ。フェルもラーグも同罪よ！」

「えー……」

至極めんどくさそうに肩を落とすフェルだがラーグやリリの暴言の飛び交いは見ていて面白いものがあるために眼を離せなかつたりする。まあ、だがそれもとばつちりがこなければの話なのだが。

夜のスラムというのは静かなものである。食糧を求めた腹をすかせた放浪者も、盗みを働く子供も、夜には寝静まる。街頭もない荒れた街並みを歩くものなど皆無に等しい。

「お掃除つお掃除！やー愉しいね？」

だがそれも化物には当てはまらないものである。

「誰なんだよお前はあ!?何者なんだよおおおおお!!」

真黒なマント。真つ赤な鼻を象徴するような道化^{ビエロ}の仮面。その象徴させる鼻以外を赤に塗りたくりながらそれは“いた”。

「わたしは誰？あなたは誰？さあて誰ですか？わかんないね。わかんないよ」

血で滴つたその両手を開けながら道化は大きく両腕を広げていく。怯える男は一人。血の海の中に倒れ伏した仲間たちの末路を見て、恐怖に震えた。がたがたとがたがたと。腰に付けられた一丁の拳銃が地面に当たつて、夜の街に響く。

「来るな、来るな……。来るなああ!!」

「あはっ」

がちやりと抜かれた拳銃は道化に向けられて道化は嗤う。がたがたと震えた男の両手では狙いはしかつりと定まらずに、がちやがちやと拳銃が音を鳴らしてぶれている。「わたしを撃つ？わたしを殺す？ダメダメ。あなたじや無理、お前じや無理、君じやできない。わたしは殺せない。あなたはわたしを殺せない」

確信を持つて言う道化には誰も勝てない。道化は間違ったことは言わないのだから。だがそれでも人は誰でも死にたくないものだ。恐怖は死に勝るとまでいかない。

ズドンと音が鳴つて弾は拳銃から放たれた。横回転しながら飛ぶ弾丸は的確に道化の頭へと狙われ、その額へと吸い込むように当たるが。

「残念でした」

それが道化の頭を貫くことはなかつた。

「それはわたしの残像ですよ」

また一人。スラムの夜の下で紅い花をさかせて消えた。



「被害は？」

「六人やられました……」

「おいおいてめーらたかだピエロ一人も殺せねーのか？ああん！？そろいもそろつて脳な
しばつかかこは！」

とある雑多のビルの一室でサングラスをかけたスキンヘッドの男が怒鳴った。周り
にいた部下の男たちはそれに怯えるように頭を垂れるが男の怒りは止まりそうにもな
かつた。

「このままやられっぱなしじゃあ周りのやつらにも舐められちまうじゃねえか。寄生虫ブランガ
は子供のお遊戯会ですかって？ふざけんじやねえぞっ！！」

「だけどタルギアさん……」

「けどもなにもじやねんだろうがつ！舐められたら暴力団おしまいだろががあつ！！」

「あらーー仲間内で争いですかー？これはわたし来なくともよさげだつたかなー？」

一人の男の怒鳴り声が反響する一室のなかで一人異質なものがいた。

「てめえは……」

それは道化だった。真黒なマントを羽織ったピエロのような赤い鼻を象徴するよう
な仮面を付けた道化。

「初めましてーですかね？ プラーガ・タルギアさん。 どうもわたし道化^{ビエロ}と言います」

「はつ。 カモがネギ背^{しょ}負つてやつてきたわけか……てめえら」

道化は部屋の真ん中に立つていた。 誰も気付かずに、 誰も気づことなく道化はそこに立つっていた。 その不気味さに気遅れることなくタルギアは部下の男たちを動かす。 上がる銃創^{マシンガン}、 男たちは道化を囮^{ショットガン}のように動き、 手に持つた多彩な銃^{ハンドガン}を向ける。

機関銃、 散弾銃、 拳銃。

そのどれもが道化へと標準が向けられていた。

「殺せええっ！」

怒声とともに弾丸が飛ぶ。 だが道化に焦りはなく、 弾丸は道化を自ら避けるように外れていく。 それを見た幾人かが、 恐ろしい物を見たかのように腰を抜かしてその場に尻もちをつくが、 タルギアはただ驚愕の表情を出して言つた。

「なつ！ てめえ……魔導師か。 なるほどな、 どうりで雑魚どもじやどうにもできねえわけか。 だが残念だつたなあ？」

「なにが残念なんですか？」

道化に答えを返す前にタルギアは動きだしていた。 その手にナイフを持つて。

「俺も少しは魔法の心得があるんだぜ？」

赤銅色の魔力がタルギアの身体から溢れ、 タルギアは手に持ったナイフを道化目掛け^{ハグ}て振りおろした。

「つち、外したか……」

振りおろされたナイフは空を切って、ビルの床を斬り裂いただけに終わつたがただそれだけとは言えない。まずにただの一振りナイフ、刃渡り十五六程度の長さのいかにも安物のようなナイフがコンクリートの床をバターでも切るように容易く切り裂いた。

それを見るだけでそれを脅威として見ざるをえないだろう。

「身体強化……ですね？」

道化は言つた。だがその肉声に一変たりとも変わつたところはない。道化はそれを見ても怯えることなく、ナイフを脅威として見てないことがあきらか。

「でも……それだけのようですね。魔法を心得て いるからと言つて、どんな魔法を使つ

てくるかと思えばその程度? ちゃんちやら可笑しいですね」

はんつと鼻で笑うように道化は言つた。それにタルギアは顔を真つ赤にさせて今にも怒鳴り上げそうになるがそれはできなかつた。

「見せてあげましょ うか。本当の殺戮まほうというものを……?」

首に当たられた冷やかな物。いつ動いたのかもタルギアはわからなかつた。気付けばそれはタルギアの首に置かれていて、タルギアはただ冷や汗を流す以外になにもできない。

「て、てめえの目的は……?」

「目的ですか？……そうですね。しいて言えばですよ。研究施設への襲撃を止めていただけないかとわたしは思うのですが」

「研究施設だあ？……ああ、あそこか。ここから少し外れたとこにあるあの立派“だつた”建物のことだな。だが、俺たちはあそこに襲撃を仕掛けた覚えはないんだが？」

「そうですか。だつたらこれからも襲撃しないでいてくれれば助かります」

素顔が見れればニッコリとでも笑っているのであろう道化はタルギアの首に刃を当てながらそう言う。依然タルギアは冷や汗を流しながら道化のされるがままとなっている。どうにかしようにもタルギアが動けば道化はなんの戸惑いも見せずにその刃を動かしてくれるのだろう。

容易く自分の首を飛ばすわけにはまだ死にたくないタルギアにとつてさせるわけにはいかない。

「俺たちへの見返りはあるのか……？」

ここからがタルギアにとつて本番だつた。すでに命というものを縛られた身で交渉というのは危険な賭けだが、スラムで生きていたらこうなることも多々ある。引くことによつて自分たちのメリットをどう繋げていくことがミソになる。

「見返り？……そうですね。見返りはあなたがたの命……と言つたらどうしますか？」

それはすなわち、道化にとつて自分たちの命はすぐにでも散らすことができると言つ

ているようなものだつた。

「ま、まあ確かに命は惜しいな……だが俺たちにも色々と問題を抱えてだなあ。それを解決するためにはその研究施設とやらを襲わざるを得なくなつてしまふかも知れんぞ。そうなつたらてめえも困るんじゃないか？」

「なるほど。……だがわたしにはあなた達の問題など関係ないので知りません。無駄にこの〈rb〉交渉紛い（ごつこあそび）を続けるならわたしの手が間違つて動いてしまうかも知れませんよ？」

タルギアは舌打ちを打ちたくなるような気持ちを抑えた。だがこれ以上道化を怒らせることだけは避けたい。だがそれでもなにか引くことでのメリットが欲しかった。

「わかった……。手を引こう」

そうするしかなかつただろう。誰でも自分の命は惜しい。どう考へてもタルギアが正面から道化を負かすことは難しいのだ。そう正面から“は”。

「そうですか」

道化はただそれだけ言つてタルギアの首から刃を外した。解放された首は流れた冷や汗と、鋭い刃の余韻でいつきに涼しくなつてしまつたがそれでもタルギアは満足した。

「約束はお忘れなく。もし違えば……」道化〈／rb〉〈rp〉（／rp）〈rt〉

ピエロ＜＼r t＞＼＼r p＞) ＼＼r p＞＼＼も真つ青な劇ショ-が始まりますからね?」

道化はそう言って身体を翻す。タルギアを背後に道化はなんの疑いを見せずに行こうとした。狡猾な獲物がその隙を狙っているのにも気づかずに、だ。

「ああ、約束するぜ……」

ニヤニヤと見えない道化の背後でうすら笑いしながらタルギアは腰に手を回す。

「次があつたらの話だがなあ!」

1

銃声がなつた。ズドンと空気を震わせた弾丸はまっすぐにタルギアにその背中を見せつける道化に向かっていつた。確信を持つてタルギアは言う。

——殺つた……つ!

銃を出すのにも気づいてなかつた。例え弾丸が放たれてから気付いて魔法を使おうが間に合うことはないだろう。完璧だ。完璧だつた。弾丸はそのまま肉に喰い込んで、その道化の柔な身体を貫く。そして哀れな道化は生き絶える。

そう思つていた。そう思ひたかつた。だけど現実はタルギアに牙を向けた。

「後ろから撃てば殺せるとでも？わたしも安く見られたものですね……」

嘆くような、悲しむように道化は言つた。タルギアの背後で。

「おいおい……。化物かてめえはよお?」

「むろん。わたしはただの道化ですが？まあ、これから消えるあなたに関係はないで
しょう」

「あああああああああああああああつつつ
!!!」

がら。逃げた。力の限り、魔力を身体に流し身体強化を使つて。道化に向けて銃を乱射しな

「約束通りショード見せましょ。うそ……ただ一方的な殺戮ショードを」

道化は笑つた。声を出して嗤つた。銃弾は道化に掠りもしない。当たることはない。それでもタルギアは銃を撃つ。内方された弾丸が使い切られてもタルギアは引き金を引き続けた。

遅れて男たちも銃を構えて撃ちだす。部屋中を飛ぶ銃弾の雨はただ一人。道化を狙つて降り注ぎ続ける。置かれた家具を壊し、高級そうなソファーは中身をぶちまけながら潰していく。

「ははは、ははははははつ!! これなら死んだだろ。これでなら死んだだろ!!!」

「決めつけないでください」

誰もが絶望した。部屋中を埋め尽くした銃弾の雨の中に道化は生きていた。傷一つなく生きていた。まるでなにもなかつたかのように道化はそこにいた。

「ああ……」

「まつたくもう。服に埃がついたらどうしてくれるんですか？たださえ汚い部屋だとうのに、あまり埃を巻き上げることはしないでほしいですね」

「あああ……」

「ああ、もう時間がないですね。わたしはお暇させていただきますよ？」

「ああ、あああああああ……っ！」

「それでは皆さん……さようなら」

花が咲いた。真っ赤な一輪、二輪と真っ赤な花が咲き誇った。部屋の中はその赤で敷き詰められる。誰もが花を咲かせた。

静かな夜の道を歩く。赤い水を滴らせた道化は点々と赤い斑点を道に垂らしながら歩いていく。道端で眠る老人や子供もそれに気づくことなく、道化は歩いていく。

街頭のないスラムの街は暗い。路地などに入ればむろんそうだが、特に夜の暗さといえば、明かりは月明かり一つ。夜目が効かない人達は決して夜には出歩かないだろう。それほどまでに夜のスラムは暗い。

「道化さん道化さん？」

そんな真夜中のスラムの街中で道化を止める声が一つ響いた。

「あなたはこんな真夜中にいつたいなにをしているのかしら？」

道化の足は止まる。月明かりが照らしたのは一人の少女。

「道化さん道化さん。あなたは……誰ですか？」

真黒な短い黒髪で釣り上がったその目で睨む少女はリリ。その人が道化の前に立つていた

道化はただ闇に

道化は動けないでいた。自身の目の前に立つ少女に気後れしたわけでは決してない。ただ道化はなぜこの少女が自身の目の前で立っているのかがわからなかつた。

赤い零を滴らせた黒色のマントが酷く重く感じた。

1

「答えなさい道化。それともわたしには教えられないことなのかしら？」

リリは言う。目の前の道化に向けて。真つ赤な血を滴らせる道化に気後れすることなくリリは言つた。怖くはなかつた。すでに正体なかみは知れている。ただ今日は確認しに来ていただけ。なぜ“彼女”がこんなことをしているのかがリリは知りたかつた。

心優しい少女だと思った。それは間違いではなかつた。彼女はただ一人閉じ込められた部屋で傷だらけになつてまで、力を示すことで自分たちに恐れられることを承知でそれを成し遂げた。自分を試みずにやりとげた少女がなぜ優しくないと見える。自分を傷つけてまで他人を助ける少女がなぜ優しくないと見える。

彼女は筋金入りのお人好しだ。

「なにか喋りなさいよ！」

「……わたしの正体を知つてどうするのというのですか？」

恐る恐るといった感じだろうか、道化はリリにそう聞いた。

「そう聞くことはどうにかしてほしいのかしら？」

「そういうわけではありませんが……」

「だつたら言いなさい。大丈夫、わたしはあなたの味方とは言わないけどあなたの敵ではないわ」

大事なのは道化に正体を明かさせることであつた。家族の一員である彼女に味方や敵などの言葉など関係ない。道化が大事な人であることにリリにとつては変わりないのだから。どう思われても構わない。そんな思いでリリはここにやつて来たのだから。

「わたしは……」

「早く言いなさい」

「わたしは……！」

「早くっ！」

道化の語尾が強くなつた。同時にリリは怒鳴り上げた。それでも道化は続けようとしない。次の言葉を続けない。

「一言。一言わたしから言わせてもらうわ……。このまま黙つてゐるならわたしはあんたを一生許さない……！一生よつ！」

ぐつと掌に力が入つたせいか少し語尾に力が籠つてしまつた。ぎゅつと握つたりりの掌は開けてみれば血こそ出てないが、力の入れすぎで白く染まつてゐる。

「さああんたは誰なのつ？！いつまでそんなふざけた仮面で己を隠すの！」

沈黙する道化。だが道化は静かに自身の仮面へ向けて手を伸ばした。仮面を掴んだ真つ赤に薄汚れた小さな手は仮面を外そうとゆつくり、ゆつくりと仮面を掴んだまま下がつていく。

「リリ！」

だがその全貌を明かす前にスラムの街中に一つの声が上がつた。

「なにしてんだお前つ！あぶねえだろうが下がつてろ！」

短刀とも見れる小ぶりのナイフをその手に少年が一人。リリと道化の目の前で息を切らしながら道化に向けてナイフを構えたラーグがそこには立つていた。

「ラーグ！」

それはリリも思ひぬことだつたのだろう。道化を待ち伏せするために夜遅く施設を出たが、誰もが寝静まつたと勘違いして出てきたのがリリのミスだつた。こんな夜遅くに外へ出る必要など本来このスラムに置いてありえることではない。それが暴力団な

どであればまだわかるがリリはその人ではない。

ならば心配してラーグがリリを追い懸けてこないわけではないのだから。普段よく喧嘩する二人だけして仲が悪いわけではなく、むしろ仲がいいほうだ。

「こんな真夜中に外に出たと思ったらなにしてやがんだリリ！こんな物騒なやつに武器の一つも持たずに死にてえのかお前はあ！」

既に正体が割れていると言つていいがそれははリリだけの話である。ラーグはなにも知らない。目の前にいる者が誰なのかまつたくもつて知りもしない。例えそれがラーグ自身がよく知る人物だったとしても月明かりしかないこの夜のスラムの中、真っ赤な返り血を浴びたふざけた道化の仮面を付けた人間など誰も知人だと思いもしないのだろう。

思うは精神異常者、殺人鬼といった物騒なことだけ。知つていたとしても誰も信じたくない。ましてやラーグは真実を受け止められるほどに強くはなかつた。

「待つてラーグ……」

「ああ？ なんだよリリ」

ナイフを構えたラーグの後ろでリリは制止をかける。道化は依然動かずに仮面を掴んだ手も半ば止まり、顔の全容は見とれない。

「わたしは納得がいかない……。あんたはそれでいいのかも知れない。でもわたしはそ

うじやないの。わかつてよ、わたしじや力不足？それともあんたにとつてわたしはその程度の存在？」

「あ？誰に——」

しかしラーグの声は遮られた。

「そうじやない。そうじや……ないよ……：リリ」

それは二人がよく知る声だつた。さつきまでは仮面に遮られ、特定の付けにくい声だつたのだが、今回のそれは違つた。二人ともよく知つてゐる声だ。ここ数日共に過ごした既に家族といつて間違ひない人物の声。

いつもなら綺麗な蒼い髪が、今は血に染まつてどす黒い赤が交じる。いつもなら優しい眼差しを持つて家族を見つめている顔が痛みに耐えるように苦痛に染まつてる。

「わたしにとつてリリもラーグも、今はここにいない皆も家族みたいな特別な存在だよ……」

「だつたらつ！……なんであんたはそんな恰好をしてるの……？」

素顔を見せた道化は泣いていた。瞳に涙を浮かべていたわけではないが泣いているように見えた。リリにはそう見えたのだ。

きつとなにか理由（わけ）があつたのだろう。リリが知らない、ラーグが知る由もない。誰も知らない理由（わけ）が。

「言えない……」

「なんですよフエル！」

「言えるわけがないっ!!」

それは誰にも知られてはいけない、フエルだけの秘密。誰も知らないフエルだけの理由（わけ）。知られてはいけない、知つてもらいたくない。

「わたしはっ…！わたしはっ！」

それは悲痛な叫び。知つてほしくなかつたフエルのこの姿。リリやラーグといつた家族には知つてほしくはなかつたこの姿。見られたならもうお終いだ。

「——っ、魔オーバードライブ力解放!!」

轟と風が吹き荒れた。近くにいたラーグは余りにもの風の力強さに吹き飛ばされそうになるが風に身体が押されるだけに終わる。

「フエル……」

リリとラーグ、二人の目の前に自身の髪と同じ綺麗な蒼色の魔力を身に纏うフエル。ゆらゆらと陽炎のようにフエルの蒼色の魔力。今だ泣いた表情の少女はだが、しかと決意を秘めた瞳で一人を見据えている。

「逃げるの？あんたはそれでいいとしてわたしが納得するとでも思つてるの？」
「思わないよ。でも……知られるよりずっといい。知つてた？わたしは」

言葉は続かない。それがフェルが一呼吸をおいたこともあるがただそれ以上に。

「フェルウウウゥッ!!」

突き立てるように構えられたナイフ。傷をつけても構わない。止められるのならそれもいいのだろうと思つたからこそラーグは走つた。

「臆病者なんだよ……」

ナイフは届かなかつた。向けられた切つ先は掠めることもなく、虚しく空を突く。ほぼ一方的な蹂躪をしてきたといつて違ひないフェルだが、それでもこの数日間で殺してきた相手にナイフや剣といった刃物を持った相手は少なくはなかつた。

それに相手してきたのは大の大人といった者ばかり。背丈も、速さも、力もラーグのそれ以上といった者ばかり相手してきたフェルにとつてラーグの決死の突きなど避けるに造作もない。

「ごめんねラーグ」

わざわざ近付いて来てくれたラーグの懐へ一步。ナイフの切つ先より身体を屈めながら踏み入る。屈むことでラーグの視界からはフェルは急に消えたよう見えたに違いない。驚くように硬直したラーグの身体に打撃を与えることなど普通に殴るかよりは楽だろう。

「でもわたしはもう帰れないんだ……」

「がああつ！??」

踏み込んだ勢いを乗せた肘の一撃は異常なフェルの怪力と合わさってさらに鋭く、そして重い一撃となつたのだろう。本気で殴れば子供であるラーグの身体などきつと真つ二つに裂けたかもしれないがそこはいろいろとやりすぎたフェルは力加減を心得ている。だがそれでもその一撃はラーグを横倒せるに充分。

くの字に曲がったラーグの身体は宙に投げ出されて真夜中の冷たい地面へと打ちつけられた。

「フェルっ！あんた……！」

今にも殴り掛ってきそうなリリ。その鬼のような形相にフェルはリリの琴線に触れてしまつたことを知るが、それでもフェルは捕まる気などなかつた。例え姉のような存在のリリを怒らせてしまつてもそれは変わらない。

「あんたはっ、今自分がなにをしたのかわかつてやつたの!?」

「邪魔をしたから払いのけた……。ただ、それだけ」

それが、その言葉がさらにリリを激昂させる。

「あんたはっ——！」

「げほっ、げほっ……！」

せき込むラーグの言葉にリリは押し黙り、倒れたラーグの下へと走る。フェルはただ

それを見ているだけ。倒れたラーグを抱きよせながらリリはただそこに立つだけのフェルを睨む。それは憎悪の眼差し。怒りに染まつたその瞳にフェルはただ悟つた。

（ああ、これで……）

「嫌いになつた？」

「ええ……、そうね。あんたがこんな奴だつたなんて思いもしなかつたわ」

「そう」

（そう。これで、これで……よかつたんだ）

睨むリリを背後（バック）にフェルは去る。ゆらゆらと揺れ動く蒼の魔力は月明かり以上に辺りを照らして、真夜中の夜のスラムにフェル一人だけが歩いてるように見えた。

「わたしは許さない……。フェル……」

リリの独白に答える者はいない。そこにもう少女はいないのだから。倒れた少年は眠つているのだから。

この日以降フェル・アフシルがこの世界に姿を現すことはなくなつた。



「これでよかつたのかな……」

『後悔するかい？でも選んだのは君だ。望んだのも君だ。正しい答えなど求めてはいけない。なにが正しいかなんて一生考えたって得られるものなんてない。それこそ人が生きていられる時間なんかでは到底無理だね』

「そうかもしれない、でもわたしは考えてしまうよ……。もつといい方法があつたんじやないかって」

『それもそうだ。人間とは後悔する生き物だよ。考える力が備わってるからこそに、あれやこれなど方法を模索する。……考えたって答えが出ないのにね』

「ずいぶんらしいことを言うね。まるで……」

『人間であつたみたいだろ？』

「あなたも人であつたの？」

『そうだね……。何百、いや数千年かな。それぐらい前は僕も人だつた。神とて最初から神だつたわけじゃないんだよ』

「そう……」

『昔は僕もいろいろ後悔したものだ。それこそ神になつたころなんかでは特に考えてばかりだつた。……話は終わりだよ。約束どうり君には働いてもらうからね、それこそ僕の手足のように』

1

なにもない世界。空白の世界。いくら見渡しても世界を塗りつぶす白い以外存在しない世界。道化はそこにいた。ここならば誰も追つては来れない。それこそ道化に魔力を埋め込んだ科学者ですらそれはかなわない。

ここは存在していない世界。存在していない者を見つけることなどあり得ることではない。でも道化はそこにいる。矛盾している。でもそれでいい。

「手足、ね。構わないけどわたしにできる範囲でお願いするよ」

『それは約束できないかも知れないな。僕は神だ、神が頼むこととはそれこそ人間でできる範疇を超える』

「うわー。無茶ぶりだね……」

できるなら遠慮したいところだと道化は言いたいがそれは無理だという話だろう。これは契約なのだから。道化が持ちだした話なれど、それに答えてくれた神である彼に応えないわけにはいかない。

「まあできるだけのことはやるよ」

道化は歩く。なにもない世界を。矛盾した存在は言う。

「わたしはわたしの家族が無事であればそれでいい」

道化は行く。優しき少女は決意したのだから。もう戻れない、戻ることはない。あの優しい暖かな場所を夢見て道化は前に進む。そこに破滅が待つていても。

2

スラムの街はいつもと同じように平常運転していた。捨てられた少年が盜みを働き、ゴミだめの中に少しでも食糧がないかとあさる子供。繩張りを意識して争う大人たち。変わらない。変わらない毎日。一人の少女が消えても変わることのないゴミだめの街。

「わたしは魔法を覚える。そしてあの子を探し出すわ。そして謝らせる」

リリはフエルが消えた昨夜にラーグにそう言つた。ゴミだめの街と言われるこの世界。だがそれでも管理世界であることに変わりはない。この世界から出る方法はあるのだ。

「魔法か……」

魔法。それは生まれて持つた才能に左右されてしまう。まずにリンカーコアという

魔力生成機関がなければ話にならないからだ。魔法が普及する管理世界でもそれがないものは少なくはない。あつたとしても「くさいものもいる。

「くそつたのが……」

握った拳を壁に向けて振るう。それはドンという音とともにラーグに痛みを感じさせた。

「あいつは俺たちを裏切ったんだよな……。なんでだよ。意味分かんねえよっ！」

信じていた。このままずつと大人になるまで、いや大人についてもずっと傍にいるのだとと思っていた。裏切られた。家族だと言っていたのに、あつさりと切り捨てていった少女に裏切られた。

「んでリリも連れていくつていうのかよてめえわよお……」

フェルを追うと言うのならばリリもいづれ行ってしまうのだろう。フェルはこの世界にはもういないのだから。あの日、あの夜にフェルは目の前で魔法を使つて世界を渡つたのだから。

許せることではない。信頼を裏切つてなお、まだ家族をバラバラにさせることなど許せることではなかつた。特にラーグにとつては。リリはまだフェルのことを家族だと思つてゐるのだろう。だがラーグはもう違つた。

「……殺す。あいつは殺す。裏切つたあいつは許せない。家族をバラバラにするあいつ

は許せない。リリを悲しませたあいつを許すわけにはいかないっ！」

憧れていた。最初に助けてくれてあの少女はまるで自分から見れば、まだ両親がいるころに見た物語の＜r b＞正義の使者（ヒーロー）ように見えた。それからはまたリリと違つた優しく見守つてくれる姉のように見ていた

「だつたら僕と来るかい？」

「てめえは……」

声とともに顔を向ければそこには白衣を着た青年がいた。なにが面白いのか妙な笑顔を浮かべた青年はまるで手招きをするようにラーヴを誘う。

「いやー、いいものを見つけたね。探し物は見つからなかつたけど成果はあるもんだね」「なに言つてんだてめえ……」

青年は怪しかつた。それこそここは元研究施設とラーヴは聞かされている。白衣といふ医者か科学者を連想させるものを身につけた青年は探し物に来たとまで言ったのだ。

「なに、見つからないものに今は興味ないよ。それより僕は今は君が欲しいね」

青年は言う。青年の魔の手はもうラーヴを絡め取つてゐることに気付かせず、ラーヴは気付かないまままだ青年を警戒する。

「力も手に入る。君が殺したいであろうその人間も殺せる。どうだい？ 充分すぎると僕

は思うのだけど

「…力、か」

伸ばされた手を掴まない道理などラーグにはなかつた。だがただ一言。

「……めんな」

小さく呟かれたその言葉。近くにいあ青年すら聞き足れなかつたその言葉はいつた
い誰に向けた言葉なのかはラーグ以外誰にもわからないだろう。

3

その日、世界の歯車は回ることになる。道を外れた三人はそれに気付くことなくお互
いの道を歩む。終着点が世界を破滅に向かわせることに気付かずに三人は歩む。
望む答えを求めて。

そして八年の時が過ぎた。

夕焼けの空の中で蒼色の輝きが空の一点を覆う。だが空の下で歩く人々がそれに気
付くことはない。

幾多の高層ビルが並ぶ街並みの上、真黒なマントと一道化＜／rb＞＜rp＞（＜／rp＞＜rt＞ピエロ＜／rt＞＜rp＞）＜／rp＞＜／ruby＞の仮面のそれを付けた少女は空に浮かぶ。

「第97管理外世界地球、ね。ここは昔のわたしがいた地球とはまた違ったところなんだよね？」

『そうだね。並行世界といえばわかりやすいかもね』

『少しは休みたいところだけどどうせそんな暇もないのでしょうか？』

『当たり。君の都合を考える僕じやないからね。まあ頑張つてよ』

その言葉に道化は呆れを隠せないが、ここ八年。ほとんど変わりばえのない対応にも慣れた道化にはただただ応（りようかい）と答えるのみ。

『頑張つてね。今回は失敗はできないのだから……』

そんな小さな声に道化は気付くこともなく、道化は夕焼けの空を飛んだ。終着点が近付いてることにも気付かずに。

集う者たち

夕焼けの下。ボロボロな今にも崩れてしまそうなアパートに彼はいた。

一室四畳半といつたところだろうか。その部屋の中で死んだように倒れる彼、櫛（たちばな）ゲンヤは転生者である。

「転生してもう九年。神様によれば原作主人公たちと同一年、ね。無印の始まりは春先だからそろそろだと思うんだけどな……」

目にかかる黒髪を払いのけながらゲンヤはゴロゴロと寝転ぶ。現在彼は迷っていた。
私立聖祥大附属小学校。原作主人公たちも通う小学校の三年生である彼はそれも毎日のように原作主人公たちと顔を見合わせていた。主人公たちはゲンヤのことを知つてるかは不明だが、同じクラスであるために名前ぐらいは知つていることだろうと思えた。

「どうすつかな……」

彼はただ平和に暮らしたいだけだつた。魔法なんでものに関わらずにこのまま大人になつて恋人をつくつて、結構して、寝るように死にたい。前世では事故死のために寿命を全うしたいという願望が強かつた。

魔法に関わつてしまえば毎日が危険と隣り合わせになることが決定する。平穏無事に過ごすことはなくなるだろう。もし原作に関わるのであればゲンヤは夢を諦めなければならない。それだけが心残りだつた。

たくさん的人が迷惑を被る無印の事件。規定のないゲンヤを入ればそれだけで負担は減ることに繋がるかもしれないが、それ以上にもしかしたら思つてもいなかつたことが起きることもある。

異常は異常を呼ぶ。同じ者同士だからこそに。

1

どこかの廃ビルの上に真っ赤な魔法陣が展開された。そこから浮かぶように出てきたのは一人の少女。黒のタンクトップと青色のショートパンツ。その上に羽織つた茶色のマントを風靡させながら少女は夕焼けの空を見上げた。

「魔力残滓から情報を解析して解析結果によるところに転移したのはあきらか……」

少女は首に掛けられた丸い宝石を握りしめながら街並みをみた。

「第97管理外世界地球……。あんたはここでなにをしようっていうのよ……フェル」
少女の呟きに誰も答えることはなかつた。

2

夕日も落ち、太陽の代わりに月が上がった時間。私立聖祥大附属小学校の制服を着た少年が商店街を歩いていた。手にネギやキャベツといった野菜の入れた袋を揺らしながら、少年はまだ人通りがある商店街を歩く。

「そろそろ……だよな」

入江神谷（いりえこうや）。橘ゲンヤと同じく転生者である彼はもうすぐ始まるであろう原作の事件を思い浮かべながら思考錯誤さす。

彼はゲンヤと同じく主人公たちと同じクラスであるが、ゲンヤとは違つて主人公たちと進んで関わろうとしている。休み時間や、昼休みも主人公たちの傍を離れることはない。主人公たちの中で彼は一番仲のいい男友達となつてゐるだろう。

地毛である茶色の髪のこともあるつて進学校である聖祥大では少し不良紛いな扱いをされがちだが、彼の持ち前の明るさと合わせてそこまで悪い評判ではない。
「プレシアの考えもわかるけどだからつて、フェイトもなあー。アリシアのこともある

から尚更ややこしいし……」

どうにかならないものかと考える神谷だが、それでもいい考えは浮かんでこない。神谷は原作の内容を全て知っている。それこそゲンヤもだが、神谷は彼と違つて内容を知つてるからこそ助けられない者を助けようと考えていた。

自分が関わることで異常（イレギュラー）な事態は起ころうが、それでも神谷は助けたいと思つてしまつた。だから神谷は考える。誰もが一幸せ（ハッピーエンド）になれる方法を。

「ああもうつ…………！ わかんねえなあ…………」

ぐしゃぐしゃと自分の頭を搔きむしって神谷は自宅への道を歩いて行つた。

3

子供は寝静まるような深夜の時間。とある公園で一人の少年と黒くて丸い塊のなにかが戦つていた。少年の同程度またはそれ以上の大きさの黒い何かは時に少年に体当たり、時には自分の身体をバラして撃ちだす。

「くっ！」

だが少年も負けじと掌を前に突き出して翡翠色の魔法陣を展開。ぶつかるなにかを

それで防ぎながらもう片方の手の中に少年は小さな赤い球体の宝石を握りしめる。

「つ、ジュエルシード……」

魔法陣となにかがぶつかり合うなか、少年は動いた。痛む腕を無視してもやらなければならぬことが在る。それは少年にとつてとても大事なこと。諦めるわけにはいかなかつた。

「封印つ!!」

握りしめていた宝石を前へと突きだす。刹那黒い何かは怯えたように声を上げ、逃げようとするが間に合わず。宝石の中に文様が浮かび始めて黒い何かは形を崩していく。「やつたつ！」

成功したことに歓喜の声が少年から上がるがしかし、その時少年が展開していた翡翠色の魔法陣が割れた。

「そんなんつ!!」

割れたのは黒い何かが最後の力を振り絞つて魔法陣へとぶつかつたため。そして黒い何かは少年の身体を弾いて地面を飛び跳ねる。

封印は失敗した。ここぞというときに少年は成功することができなかつた。挙句失敗して怪我を負つた少年に追う力は残されていない。

「誰か……僕を助けて……」

そう小さく呟いた後、少年は翡翠色の輝きを残し消えた。後には見たことのない種類のフェレットが眠るように倒れていた。



真夜中の下。明るい月明かりと街頭が照らす街の中。そんな民家の屋根上に道化はいた。

「21個の巨大な魔力反応……。確かジュエルシードだつたけ?まあいいや。わたしはそれを回収するだけだし」

道化にとつての懸念はロストロギアであるジュエルシードが暴走してしまわないとだけだった。今言える懸念はそれだけだった。

「この魔力反応……嘘つ!ロストロギア?!しかも魔力からして多分思いつきり封印指定のやつじゃない!」

同時刻。短髪の少女は月を背景に空を飛び周っていた。雲もそれほどなく視界良好な今に探し人を探さない手はない。だがそれも止めざるをえない状況になつてしまつた。

「なんでこんな時に限ってロストロギアが管理外世界にあるのよつ!」

少女が叫ぶがその疑問に誰も答えることはできない。例えそれが“事故”だつたとしても、それが少女に知る術はない。

「ともかく急いで封印作業つ！」

握りしめるは昔求めた力。誰かを助けるために、大切だと言つて離れて消えた彼女を探すために六年。その間ずっと研鑽させた力。

「起きなさい……パイロクイーンつ！」

魔法の力を。

『YES MASTER』

首の宝石が輝いた。それは起動の合図。ただそれだけで少女は力を得る。六年という長い月日をかけて培つた巨大な魔法の力。それは万人が求めた奇跡の力、誰もが望んだ力、少女が一番後悔した過去で欲しかつた力。

『SET UP』

宝石から女性の音声がながれた。輝く宝石は少女の首元から離れて空を飛ぶ少女の前を自由飛行。

「いつもどうりバリアジャケットはいらないわ。魔力の膜でわたしを覆うだけで結構よ」

『OK MASTER』

少女の周りを螺旋を描いて飛行し、宝石は少女の手元へ向かう。飛んできた宝石を受け止めた少女は満足そうな顔をして、急停止。宝石を握った右腕を横薙ぎに振るい、掌を開けた。

そこには握られていた宝石はなかつた。ならなにがあつたのか。

『DEVICE MODE』

そこには燃え盛つた火種が上がつていた。轟々と少女の掌の上で燃える炎は直線状へと形を変え、銀色の棒に変わる。だがそれで終わらない。棒の先端と握つた手から二の腕まで炎が覆う。だがそれに少女は変わらない表情のまま、炎を振り払うように一度棒を振つた。

炎は搔き消える。少女にはまるで暑さを感じさせないその炎はただ少女を護るために己の姿を形作る。腕には朱色のガントレット。棒の先端には先ほど消えた宝石を中心と砲身と砲身と宝石を繋ぐ管。そして申し訳に付けられたようなマガジンのような物。マガジンの後ろには引き金が付けられており、それを引くことでその砲身からなにかが出ることが予想させた。

「カートリッジシステムの調子はどうパイロクイーン？」

『良好です。お気遣いなく主（あるじ）よ』

風に靡く黒髪を払いながら少女は返事をする相棒に苦笑する。きつと本当は良好と

は言はずらいことになつてゐるに違ひないというのに、この無愛想な相棒はきっと眞實を話すことはないだろう。今だデバイスの強度問題や、魔導師の負担などで危険視されるカートリッジシステムを無理矢理に組み込んだのに良好であるいはずがないといふのに。

「ずいぶんと負けん気が強い性格のためにきっと支障があることに不満を隠せないのでだろう。そしてそれで主である自分を心配させたくないという一心でこの相棒は基本的に少女を頼ることがない。」

「いつたい誰に似たものかと口に出して言いたいところだが、そんなこと少女の知り合いの誰かに聞かれたらきっとそれは自分自身だと返つてくるに違ひないと少女は確信していた。」

「まああんたがそう言うのらしいけど、不調があつたらいいなさいよ？」

『OK M A S T E R』

返事をする相棒に満足したように頷き少女は浮かせていた身体を止めてまた飛んだ。身体の周りに赤の残滓を残しながら少女は空を飛んだ。

『主っ！九時方向上空から魔力反能!!』

「管理外世界で魔力反能!!」

「それはまるで嘘のようなできごとだ。きっとそれが運命だつたのだ。」

『……これは……。つ!? 来ます。魔力弾です!』

少女を中心と考えて左上空。そこから飛んでくる灰色の弾丸。本来なら存在していることがおかしい力の塊。少女がここに来たのは偶然だつた。ここは魔法が栄えてない世界。ただそこに次元移動したある人を探して少女はこの世界へとやつてきたのだから。

「防ぐわよっ!」

『YES PROTECTION』

管理外世界と管理世界の簡単な違いを言えばそれは魔法があるかないかと、それとどある組織に管理されているか、されていないかという違いが上がるだろう。だがこれは大まかな違いであり、それ以外にも理由はあつたりするのでそれほど参考にはならないかもしけない。

だがそれでも少女はこの世界に魔法文化がないことを調べてからやつてきている。

『これは……!?』

「ぐううう……意外と鋭い……つ!」

灰色の弾丸には貫通効果のある魔法が掛けられていた。少女が目の前で張った赤い波紋状に揺れる楯も効果によつて貫こうと弾丸の半分が少女の楯に穴を開けている。ぎやりぎやりと楯を削りながら蠢く弾丸をどうにかできないものかと少女は考えたい

が、右手の相棒が少女に残念な報告を伝えた。

『敵魔力反能らしき存在がこちらへと急接近してきます……』

「うそつ、マジ!?!」

弾丸を止めることに精一杯なこの状況。加えてこの弾丸を撃つてきたであろう存在の急接近という知らせは非常にマズイ事であつた。防ぐ手立てがないわけではないのだが、すでに半分以上まで埋まるように楯を削るこの灰色の弾丸を吹き飛ばすためには少々決意が必要だ。

まあそれでもこの状況を打破するためにはいちいち決意というものを少女にする暇など与えられているわけがないのだが。そもそも魔導師になつた時点で傷つくということと隣り合わせになつたはずである少女にとつてはそれなりの覚悟ができるはずなのだ。

それがなければ魔導師などできるはずがない。

「わたしは自分を傷つけるっていう趣味なんてないんだけどなあつ！」

『BARRIER BREAK』

それは相手の楯を碎く魔法。碎ける楯は力量によつて変わつてくるが、基本的に術式を理解していく、その楯の魔法の術式を解くことで壊しやすくする魔法だ。要は相手の魔法を解析して綻びを見つければいいだけの魔法となる。

だが少女はそれを自身の楯に使つた。

砕ける赤。パリンとガラスが割れるように爆散したそれと同時に灰色の弾丸は少女を狙つた起動から外れた。だが少女は無事とは言はずらい。

ビリビリと爆発した楯の影響を思いつきり受けた右腕は痺れ、怪我こそないがそれでも戦闘には支障をきたしてしまった状態だ。

『主よ……』

「ええ。わたしも視認したわ」

痺れた右腕を悟られぬように、普段と同じように右腕で構えながら少女はその人物を見た。明らかに不審者のように見えた。

「そこまで怪しいと逆に笑えてくるわよ……」

黒のローブとフードで顔を隠した彼とも彼女ともわからないその人。明らかなのは先ほどの灰色の弾丸を撃つたのはその人であることで、ただそれ以上はわからない。男なのか女なのか。それすらもわからないこの怪しい人物はいつたいどんな目的があるて少女へと魔法を撃つたのだろうか。

ただ少女としては一番知りたいのはそこであつた。

もしかしてなか自分に非があつたのかもしれない。そう思うにはまだ早計だが、ないわけではないだろう。ありえないということはありえない。そこだけは間違つては

いけないのだ。

「で、わたしになんのようかしら。荒っぽい襲撃者さん?」

その言葉の返答は言葉ではなくて同じく灰色の弾丸だった。

1

少女は予想していないことに多少驚愕して、一瞬硬直したのが悪かつたのだろう。迫りくる多数の灰色の弾丸にすぐに手を打つことができなかつた。だが誰がそれを非難できようか。

「会話もなしに攻撃行為って……、わたしに恨みでもあるのかしら?」

灰色の弾幕に包まれるように囲まれた少女になす術はないだろうともしこの場に誰かいたらそう思ったのだろう。実際にそうだと言える。先ほどと同じように貫通の効果を受けられたその灰色の弾丸は下手に楯を張つても物量と貫通の効果で貫かれて少女の終わりしか予想できない。

今だローブの人の周りには灰色のスフィアが三個ほど浮かび上がつており、そこから無制限にと言えるほどの弾丸が生成されてしまふ。少女に向けて撃ちだされる。

今は危なげになんとか避けているがそれもそろそろもたないだろう。なぜなら先も言つた通り物量の差が違うのだ。無制限と言えるかもしれない弾幕の中を一生避け続ける生物などいない。体力の問題然り、避け続けるということと弾丸に当たると言う恐怖による精神の浪費然り、と。

「つーと…。今のはちょーっと危なかつたわねえ…」

右腕を上手く動かせないことがここで悔やまれた。右方向から迫つた弾丸を上手く避けられずに少女の脇腹へと少し掠つてしまつた。ジワリと血が滲む脇腹を左手で少し押さえながら少女はピクピクと引き攣る頬を隠せない。

内心怒りと焦りで少女は顔の筋肉が引き攣るのを止められないのだ。どうしてここまで徹底的に痛めつける様なことをするこのフードの人物に少女は怒りを超えて正直怒髪天とまで言いたいのだが、正直少女にそんなことを言う余裕がないのだ。

「なんて規格外な魔力量よ…」

こんなにバカスカとバカの一つ覚えのように弾幕を張るフードの魔力もその内尽きるのではないかと期待はしていたのだが、依然尽きる様子は見せない。少女にとつてはその魔力量は羨ましい限りと叫びたいところだが、その前に打開策を見つけなければ少女は死ぬだろう。

『設定が非殺傷ではありませんね』

「そうみたい。直で当たれば脇腹なんて目じやないわね……」

正直勘弁してくれと少女は言いたいが、そもそもいかない理由が少女にもあつた。諦めることはできない。ここで逃げたら少女は一生後悔するだろう。探し人がいつまでこの世界に滯在しているのかはわからないのだから。

「あんたは壁ね？わたしの邪魔をする壁。超えなければいけない壁……。だつたらわたしにやることなんて一つしか、……ないつ！」

覚悟はどうの昔に決まつていた。ただそれを再確認しただけ、少女が諦めるのは過去も現在も未来も全て合わせて一つだけ。あの時、あの瞬間その時だけが少女が諦めた時。それ以外に少女が諦めるという選択肢など在つてはならない。

「やるわよパイロクイーン！」

痺れた右腕？そんなの無視である。痛む脇腹？歯を食いしばつて耐えてればなんとかなる。だから少女は杖を振るつた。右手で。空に浮かぶ足下に赤い円形の魔法陣が浮かび上がつた。

『LOOD CARD RIDGE』

一瞬。そう本当に一瞬だがフードの人物がそれに目を見張つた。フードはそれがなにかわからなかつた。だが一つだけわかつたことがある。

「装填完了。排出しなさいパイロクイーン」

『OK MASTER LOOD CARD RIDGE』

杖の先端、砲身の後ろにあつたマガジンがガシヤツつと機会音を上げて動いた。その逆からは排出される空薬莢。

「魔力が……上がッたツだと？」

それはフードがここにきて初めて発した言葉。だが少女はそれに気付かず、杖を胸の位置まで持ち上げて突きだす。

「手加減はなしよつ！」

迫る弾丸からも逃げず少女はただ杖を構えるだけ。砲撃魔法を使おうがこの物量と貫通効果の掛かった弾丸を容易く突破はできないはずだとフードは信じていた。でなければ“魔力まで持つてきた”意味がない。

そう簡単に破られるものではないのだとフードは少女を嘲笑う。

「焼けつくせつ、ブレイズ⋮」

『BLADES CANON』

炎熱変換。先天的な才能の一つだ。生まれた時から魔力を炎へとなんの労力もなしに変換することができる才能。少女はそれに恵まれた。

「キヤノン！」

砲身の中で静かに燃え盛っていた炎の塊が蠢いた。中心の宝石と繋がつてゐる管から

何かを吸い出しながら炎は段々と規模を変え、熱量を上げ、まるで超小型の太陽のようだつた。

キーワードとともに撃ちだされた超小型の太陽は炎の軌跡を残しながら少女の前を阻んでいる灰色の弾丸を容易くのみ込んだ。それは見ていて圧巻だった。

杖の砲身から炎の線の軌跡を残しながら進む超小型の太陽は阻む壁を焼けつくし、今だ無制限に撃ちだされている灰色の弾丸を意にも留めずにフードへと迫つていった。途轍もない熱量とその規模でのかさにフードはまるで冗談だろうとばかりに見ていることしかできなかつた。

それが炎の女王

それは依頼だった。仕事とも言えるだろう。最初は簡単そうにその話を聞いていた。

「なに。ただ管理外世界に落ちるであろうロストロギアの回収の手伝いと他回収者の妨害と、いつたところかな?」

简单だろう。と聞く昔と変わらず憎たらしい笑みを浮かべる青年に苛立ちを覚えた

がら答えた。

「もちろん殺してもいいインだらうなア?」

「他の回収者のことかい? うーん、それは君に任せるとしよう。ただ面白そうのがいたら僕に報告してくれると嬉しいな」

暇そうにクルクルと回転椅子で回りながら喋る青年を尻目に見て、壁にもたれる。目の前にいる“白衣”を着た青年はいつも何かをしていないと気が散るのか、例え人と話をしている時であろうがお構いなしになにかしている。髪弄るなり、椅子に座つて周るなり、資料を整えるなり。数えればキリがないからしないが、すでに八年の付き合いのために慣れたために今はなんとも思つて いたないが、昔は酷かつた。

「まあ君のことだから全員殺すんだと思うんだけど、さ……」

つまらなさそうに呟く青年に少し違和感があつた。だが気付かない。

「まあ頑張つて来てよー」

呑気に手を振るう青年（バカ）を背後に扉を閉めた。



フードは焦つた。隠れた顔の表面に汗が落ちていくのがわかる。それはもうじき迫る超小型の太陽とでも言える規模と熱量を持つた砲撃のため。ただその暑さで汗が流れているわけではなく、命の危機というものに対して冷や汗も流しているという状況だ。

「フェンリルウウうううツツ!!?」

『JA』

手首に巻いていた槍の形をしたキー ホルダーをその手にさらけ出してしまってほどにフードの人物は焦つていた。

『GET SET』

「凍えろつ、吹雪よ全てを凍りつかせ！」

『BLIZZARD COFFIN』

必死だつた。普段しない詠唱まで行つてわざわざ術式を安定させて魔法の制度を上げる。今までに弾幕を突破した者がいなかつたために破られたことを考えていなかつた。この八年ずっとこれで負けなしだつたことからこれからもこれで終わらすことができるのだと考えていた。

対策なんとしてなかつた。愚かだつた。昔言われていたことだつたというのにそれを放置していたのだからこれぐらいの罰は当然なのかもしれない。だが死ぬのはまつびらごめんだとフードの人物は思う。

「碎けやがアれやアああ!!」

氷結変換。魔力を氷結させることができるようにする先天的な才能。少女が炎熱と愛称が悪いと思う者もいるともうだらうが魔法に限つてそんなわけにはいかない。それを超える魔法ならば魔法どうしでもそれを凍らせることは可能である。例えそれが燃え盛つてる炎であろうが。

吹雪が吹雪（ふぶ）く。パキパキと炎を凍らせながら吹雪は段々と勢力を強める。背後に炎の軌跡が消えたころにはそれは完全に凍りついていた。

「ふ、ふんつ。やはりこの程度ー!?」
焦つたわりに呆気なく凍りついた炎の塊を見て自尊心を取り戻しはしたが、まだ少女

の猛攻は止まつてはいなかつたのだ。

「業火炎武ー」

砕ける炎。凍りついた炎の塊を碎いて進む少女はその手に持つた杖に炎を侍らかせながら振り上げる。キラキラと空を舞う氷の欠片ダイヤモンドダストと燃やしつくすような勢いで炎は空中で蛇のようにうねり上がつた。

『BLASTER EDGE』

振り下ろされる炎の刃。轟と砲身から吐きだされるそれはただ焼きつくすためだけのものではなくて、敵を斬り裂く炎の剣。人の身など触れれば溶かしてしまいそうなそれはなんの戸惑いもなく、フードの人物へと下され。

「舐めてンじヤねエえぞオ！」

だがそれを許容するわけにはいかないのが世の常だ。

『ICE FANG』

槍の矛先に形作られた一つの牙。それは誇り。フードの人物が気付き上げた一つのプライドの塊と成つた証そのものの形。

「氷狼フエンリルの牙はア……そんなちんけな炎に溶かされちまうほどオ、柔アじヤねえエンだ

よオオ！」

牙と刃が交差する。片や氷、片や炎。相反する二つの力は激しくぶつかり合い、お互

いを削り合う。

「ぐつ!?

「オウ!?

相反するからこそその力はお互いを弾き返した。だがそれでも上がった腕はまた目の前の獲物へと振り下ろされる。削られた炎と氷の欠片が空へと還元されながら、身を削り合いながら二人は腕を振るうのを止める事はない。

わかっているのだ。ここでどちらかが引くまでこのやり合いが止まることはないことが。

だがそれでも二人はそれを知っていても、確信していても腕を止めることはないと、止められない。引くということは相手の力に押し負けたということだ。

つまり“負けた”ことになる。今、一瞬のこのやり取りでは負けたということになってしまう。引いた後でも尚戦いは続くとしてもそれでも負けたことを許容できる“二人”ではないのだ。

昔っから。

「潰れちまえッ！」

『POWER BOOST』

フレードの人物が握る槍の牙が肥大化した。牙に注ぐ魔力をさらに増やし、強化したの

だろう。その分大振りとなつた一撃になるのだが、なぜか少女の腕は大振りとなつた一撃と同じ、もしくはそれ以下の速度で振られた。

「一つ！？」

炎が牙に押された。フードの下からクハツと笑いを押し殺したような声が上げられ、槍を振りかぶる。

「……」

弾かれた腕は大きく弧を描いて間に合いそうになかつた。少女は今にでも振り抜かれそうになつている牙を見て小さく息を漏らす。

腕が限界だつた。痺れを我慢して打ちあつていたが、さすがに強化された一撃に耐えられるほどとはいかなかつた。先まではどちらも似たような威力で相殺されていてなんとか耐えられていたのだが、もうそれはできない。

「なに自棄やけになつてんだか……」

そもそも少女の本場は近接こぢらではない。相手は見るからに近接が専門なんだろうが、それの舞台に下りてしまつた時点でこちらに非が上がつてしまふのは当然。

「これで……終いだッ！」

牙が動く。まるで獲物を狩る肉食動物のように首元へ喰らいつこうと。

「クイーンっ！」

だが狙つた獲物が草食動物と誰が決めたのか。

『C A R T R I D G E R O O D』

マガジンから弾丸を射出。ズガンと射出口から撃ちだされた薬莢はほのかに赤の軌跡を纏い。

「少しは女王の威厳を魅せないとね！」

砲身は新たに火を噴く。

『B A K I N G H E A T』

それはただの炎。剣の形すらなさずに、ただ噴出された炎。だがそれが少女の窮地を救うのだ。勢いは止まらない。まるでジェット噴射するように炎は勢いを上げて、少女を“落とす”。

「なッ!?」

あまりにもの勢いで消えたように見えたかもしねない。牙が裂いたのは虚しくも空に舞う炎の鱗粉（りん紛）と大氣だけに終わる。

まさかの行動。これまでバカみたいに近接にこだわった少女はもうそこにはいない。確かに何事にも負けたくはないと少女は考えていた。だが、それにこだわって死んでしまえばもう終わりなのだ。戦いに置いて小さなプライドなど貫くなど愚者がすることである。

高度が下がる。下がる。少女は落ちながら大きく空振りしたフードの人物を見据えた。それは確かに隙。大きなチャンス。

「業火招来……」

もともと遠距離に長けた身だ。この絶好な機会を撃ち損じるほど未熟でも、引き金を絞れないほど愚者ではない。

「プラスタアアアアア……レイーーツ!!」

『BLASTER LEI』

両手で構えた杖の引き金を惜しみなく、これでもかというぐらいに力強く引いた。ガガガガッと続けて排出されていく薬莢にも気にも留めず少女は的から視線を外さない。なく。

1

ブ拉斯ター

レイ

それは光線。炎を限界まで圧縮して放つたそれはまさしく炎の光線と言えた。大振りの隙でまだ槍を戻すことさえできていなかつたフードの人物にそれを避ける術などなく。

だが防ぐと言つても少女のこれでもかといつた具合まで込められた魔力に、それを見

押しするカートリッジの魔力を上回る防御魔法など刹那とでも言える時間で用意することなど無理だ。断言できよう。

「勝つた」

誰が言つた。少女が言つた。今だ光線を撃ちだす杖を両手で握りながら少女はそう確信したのだ。パキツつと不吉な音を鳴らす手元に気付かず少女はまだ早い勝利の確信を得た。

驚く暇も与えず、後悔させる余裕すら持たせない。高密度に圧縮された炎の光線はフードの人物を飲み込んだ。

『COMPLETE』

光線をすべからず撃ちだした杖は完了とただ一言告げて砲身から水蒸気を噴き上げた。冷却処理。魔法を使うことでデバイスに処理異常をきたせないために溜まつた熱を逃がす。

「ちよつと……やりすぎたかしら？」

今だもくもくと煙幕のように煙を上げるそれを見ながら少女はそう言うが、別段と反省しているような兆しはない。

ポツポツと汗を落としはするが、それはやりすぎたことで心配しているわけではなく、ただ魔力を多く使いすぎたために来た疲労の汗だ。決して冷や汗ではない。

『思つてもないことを口にするのはよくないと思ひますが?』

「……まあそりだけど」

まさか心を見透かされるとは思わず注意する相棒について口を尖らす少女。

「炎熱変換させた魔法だから非殺傷だからってただ失神するだけじやすまないでしょ
うね」

殺さないための非殺傷設定だが魔力を炎に変換させているのだから当たれば無傷と
はいかない。当たれば確実にノックダウンさせるような魔力を込めて撃つたのだ。『
多少』の火傷は大目に見てほしいものだ。

『まあ今のが火傷ですむと思うのなら主は頭のない大馬鹿という考えになりますがね』
「うつ……」

数万度。溶岩の熱なんて勝負させることすらおこがましいその温度。太陽の熱とタ
メを張るその熱はいくら魔法で殺さないという設定がされてようと多少の火傷ですま
すほど柔な物ではないのは確か。それを本当に火傷ですむと思ってるのならそれはバ
カというよりただの考え方しだ。

「まああれだし?先に襲つてきたのはあっちだし?正当防衛じやんわたし」

と少女は言うが防衛もここまでくればそれは『正当』ではなく『過剰』に入る。簡
単に言うならば単にやりすぎだ、ということ。

『……こんなバカがわたしを使っているというのが信じたくありませんね』

もし彼女（デバイス）に口があつたのならきっとため息を吐いていただろう。



空が明るかつた。夕暮れもとうに過ぎ、夜の時間だと言うのに空は月明かりだけではなく、小さな小型太陽が浮かび上がるような明るさを見せつける。

度々聞こえる上空の爆発音に道化は少し苛立ちと呆れをまじ合わせた感情で空を見上げていた。

「どこ」のバカですか？」

先から道化はこの一言に尽きる。

「バカみたいに魔力を使って……感知がまともにできもしないじゃない……」

洩れるため息。夜道を照らす街頭の下をゆっくりとした歩調で歩きながら道化は言う。どこぞの魔導師（バカ）か道化には知りはしないが、空の上で魔力をふんだんに使って戦闘しているせいで道化の感知魔法に支障をきたせている。

感知という分野が得意ではない道化にとつて探し物であるある宝石が放つ魔力を感じるということだけでもかなりてこするというのに、まったく別の二つの魔力がぶつか

りあつて、周囲に散りばつてくれるものだからもはや道化にとつて探知不可能とまでに言わせる具合だ。

基本的に力任せが得意な道化であるからこそ、感知など器用なことなど期待するだけ無駄であるのだが、それでも誰かに邪魔される。そもそも上空の魔導師たちは意図していないとしても、それでも邪魔になるということだから性質が悪い。

「はあー……」

またため息が漏れた。頃垂れたい気持ち全開の道化だが、そうするわけにもいかずいつたいこの感情を誰にぶつければいいのかと自棄になつてしまいところ。そこに。

「ん……？」

民家の屋根を飛び跳ねながら近付く黒い物体が見えた。見てしまった。

「ん——」

にやける口元を止めるなどできはしない。そもそも止める気もない。もし道化が仮面など付けず素顔であつたのならそれを見た誰かはきっとこう言うのだ。

——あれは悪魔の微笑みだった、と。

「やつぱりあれだよね。苦労した分はいつか返るつてやつ?」

すでに足は動きだし、ゆっくりとしたペースは走りに変わる。ダツという疾走感をもたらしそうな音を立てて地面を蹴つた道化は意氣揚々と街を駆けた。

少女は思つた。

なにかおかしい、と。

「パイロクイーン……」

『どうしましたか主?』

いつまで経つても晴れない煙り。確かに直撃したのは見たわけではないが、あのタイミングで防ぐことも避けることなど不可能だ。だからおかしい。煙は晴れない。

「まだ終わってないかもしないわ」

手に握った相棒をもう一度力を込めて握りしめる。そろそろ右腕の痺れもとれてきた頃合なのですでに支障などきたしていない。魔力はそれなりに使つてはいるが、それ以外は万全。

『まさかあれの直撃を喰らつてまだ動けると主はお思いですか?』

そう言う相棒に少女は否定したいところなのだが、どうにも否定できない。煙が晴れないのはまだいい。だが、どうにもおかしいのだ。直撃して氣を失っているのならなぜ

奴は“落ちて”こないのか。気を失つたまま魔法を使えるものなどこの世にはいない。

だからこそおかしいのだ。少女がこうして空に浮かんでいられるのもそれは飛行魔法というプロレスの恩恵のお陰。つまり魔法の力だ。それはあのフードの人物にも変わりはないはずだ。

（プラスター）炎の光線の直撃を受けて失神しているなら直撃を受けた時点で相手は空から落ちていたはずだ。なぜ気付かなかつたのか。少女は舌打ちしたい気持ちで煙の中を睨んだ。

そもそもなぜ少女は初めにその事実に気付かなかつたのだ。空の上から落ちると言うことはそれは死を意味するのだ。少女は相手を殺す気などさらさらなく、落ちていくフードの人物を救出する気まであつたというのに、まるで“強制的”にフードの人物から意識を逸らされたかのように少女は相棒と普段と変わらずに会話していた。

おかしいのだ。おかしすぎるのだ。気付いてしまうと自分に失笑してしまうほどに違和感があり、不甲斐ないどころか穴があれば自分から入りたいぐらいに。

もし普段の少女が先の少女を見ていたのならあんたはバカかと罵声するぐらいに。違和感がありすぎて逆に気付けなかつた。

「…今まで隠れているつもり。いくら煙で姿が見えないって言つてもすでにわたしは気付いたのよ？」

狼はいまだ倒れず牙を隠して待っていたのだ。呑気に帰り立つ獲物の寝首を裂くた

めに。

「流石。と言つたところかな。安全基準を無視したカートリッジシステムを使うだけはあつてそこそこにできるみたいだね？」

声質が違つた。そこで声を返してきたのが自分を襲つたフードの人物でないことがわかつたが油断はできない。段々と晴れていく煙だがまだそれでも姿が捉えられるほどに見えてはいない。声からして男だということだけはわかつたが、それだけで相手の実力などわかつたものではない。

「まあ僕が割り込まなかつたら確実に君の勝ちで終わつたんだろうけどそうもいかないんだよね。まだこの子には利用価値は残つているし、失うには惜しいんだ」

見えたのは白衣。それこそ医者やどこぞの科学者が来ていそうな真っ白な白衣だ。

「医者……？」

「ノンノンつ。ナンセンスだよ君」

意味としては頭は大丈夫か、だろう。もし文章なら語尾に音符マークが付きそうな具合。その言葉の意味に少女は気付きはしなかつたがなにか良くないことを言われたのを理解はできた。

だから顔が少ししかめつ面になるのも仕方ない。

「僕は医者というより科学者だね」

治療など専門外だと言うその男。だつたらなぜという疑問が少女には思い浮かぶ。科学者は利己的な存在だ。全てがそうだとは言わないが基本的に科学者というものはそういうものだろう。

だがと言つて少女には色々考えるつもりなどない。少女に重要なのはその科学者がなぜここになどではなくて。

「あんたはわたしの敵?」

敵かそれではないかのどちらかだけ。それを聞くまでは構えた杖も下ろすこともできない。

「そうだね。君にとつてどちらがいいなんて聞くのは野暮だらうけどあえて僕は聞こうじゃないか。君はどう思つてのかな?」

もちろんそこは少女にとつて敵ではないことが望ましい。そういうことだが、そう答えるもその男が敵ではないなんて誰が言えるのだ。そんなことは男しかわかることができないことであり、まさしく聞くことなんて野暮でしかない。

敵であるか、ではないかなんて言うならば男の気分にもよるのだから。
それに。

「おいてめエ……」

「おや。これはこれは……えらく痛めつけられたものだね? 油断でもしてたのかな?」

煙は完全に晴れた。白衣の男の後ろには被つていたフードを燃やされ、所々焼けたローブと煤を顔に付けた金髪の少年がいる。直撃はしてなくともあの熱量と炎は白衣の男もタイミング的にも完全に防げはしなかつたのだろう。焼けたローブがそれを物語っている。

「文句が言いたいのはわかるよ？でもね。それで君が無事だつたという証拠はないね」

なにか言いたそうな金髪の少年を押しのけて言う白衣の男。閑話休題（ともかく）。少年がまだ氣を失つていいないとということは今だ勝負は付いてない。少年は槍を収める気などさらさら在りはしないだろう。

「結局は敵つてことでいいんでしょ？」

「うん？まあそうだね。そうなるね」

二対一。正直分が悪いのはわかりきつたことだ。杖を持つ手に手汗が、ぐくりと鳴る喉も少女の気持ちを代弁してくれる。

「まあ僕としては関係ないことだから手はださないつもりだつたのだけれどねー。そう判定されでは出すしかないでしょ」

顔が歪む。ついつい舌打ちまでして少女の感情を表現してしまった。憎たらしく笑みを浮かべる白衣の男の扱いに間違えてしまつたことが少女にとつて悔やまれるがこれ以上はそうもいかない。

「……やつてやろうじゃないのっ
開戦だ。

上も下も戦場

どうやら気付いたのは自分だけではなさそうだ。そう思つた道化にはそう思えるだけの理由があつた。理由としては接近してくる物体になんらかの反応をきたしたのか、それとも道化が気付かせるようなバカをしてしまつたのかどちらか。

ただバカをしてしまったことに関しては道化に覚えなどまつたくなかつたので除外。まあ気付かぬうちになにかしてしまつたということはよくあることなのだが、それでも今回に対するまつたく覚えがないので完璧に除外だと、そう道化は思いたい。

「反旗旺盛ね……」

—G
A
A
A
A
A
A
A
A
A
ツ
!!

人の言葉ではないその声。まつたくもつて動物の鳴き声や吠える声に近いがまたこれは別物だ。そもそも下手をすれば成人男性とタメを張れるぐらいの巨大差を持つた丸っこく、所々触手の生えたそれがただの動物だなんて道化にとつては思いもしたくなかつた。

「ヤハゼルシナウ?」

今だ民家の上を飛び跳ねて行つてゐる物体を追つてはいるが威嚇の叫びを上げられた。

それはこれ以上ついてくるのならなにかしらするぞつて意味だろう。だと言つて道化に物体を逃す意味（わけ）がない。

反撃を恐れるのならそもそもそれが追わなかつたらいいだけ。ただ興味本位だけで追つているのなら道化だつて厄介事面倒事のようなこの事象に深く立ち入ろうとはしない。必要だからこそ道化は物体を追つて いるのだ。

「まあともかくに、わたしも屋根上に上がりますか……」

人間の脚力と思えないような跳力。トンつと軽やかに道化は走りながら屋根上にえと飛び上がり、物体と同じ台『ステージ』に乗つかる。

「G A A A A A A A U U U U ツ!!」

それを敵対行動と認識した物体はドンと屋根上に身体を押しつけて止まり、道化へと向きあい。そして勢いよく道化の下へと飛び跳ねた。

「速つ!？」

あまりにもの速さにそれは大砲の弾丸に見えた。正直それを直撃して道化も、道化が立つその屋根上も耐久力的に耐えれるわけがない。粉碎。その一言に尽きる。

当たるのは勘弁したいと道化は足を動かしたいところだがそうもいかないわけがある。

「あー……」

こんこんと屋根上を叩く足がそれを教えてくれる。道化がいるのは民家の屋根上なのだ。“人が住んでる”家の上だ。

「避ければ悪人？」

人様に迷惑をかけるものがそう言われるのならそうなつてしまふ。時間も深夜といつた具合ではなく、街の家の電気はそこら中で付き、街頭以外で街を明るくしている。いくら“人払い”的術式で街行く人々を避けていようが、限界がある。

屋根を破碎する音など街中に広まりそうな轟音。驚いた家の住人も、他の家の住人も気付いて騒ぐのが眼に見えた。そうなれば道化の顔も見られてしまう。

この世界の警察の厄介になるのは御免被りたい身としてはそれは避けるべきなのだろう。ただでさえ“追われる”身なのだ。

「ほんと厄介だよね……。どこも警察機関っていうもの、はつ！」

右腕に道化の魔力特徴である蒼の刃を構成。手首から短い短刀のようなそれをさらには魔力を注いで伸ばし、形を丸めていく。見れば見るほど打撃武器『バット』になつたそれをその場で低く腰を落として構えたが、如何せん。急ごしらえのこの構え。

打てるのだろうか。

「G A A A A A A A A A ツ!!」

「やあああああああつ!!」

吠える両名。どれも街中では近所迷惑であるそれに気付く者は誰もいはしない。右腕手首に添えた左手と右腕に精一杯の力を込めて振るつたバットは空振りすることもせず、運良くなのか芯のど真ん中へと当たり。

「GAAAUUUUツ!??」

丸みを帯びたその黒い物体を凹ませながら空へとかつ飛ばした。衝撃に屋根がミシミシと嫌な音は立てたが道化は聞かないことにする。

「これなら」

空なら物理被害を気にすることもない。だが懸念は今だ上空で戦っている魔導師たち。少し開け場所でもあれば物体をそこに誘導したいとこだが街の地理に詳しくない道化にそんな場所がわかるはずもない。

「我ながら考えることは苦手つてね……。誰に似たかな？」

思い浮かぶのは姉のような存在の少女だが、今もこれからもきっと会うことはない。思い出したことでうつすらと微笑みが顔に浮かび上がり、件の少女に会いたいと思つてしまつた。

できるはずがないことなのに。

「我ながら考えなしね……」

閑話休題《ともかく》。戦闘中に雜念など入れてる場合ではない。先から口調もだい

ぶ崩れがちなことから道化は集中。真剣に物体の後を追つて打ちのめす。それから昔の思い出に浸ればいいと思いなおした。

1

「アイスバレット！」

灰色のスフィアが二三個周りに展開。そこから撃ちだされる氷の弾丸は先と同じく殺意の塊だ。

「完璧に殺す気よね……」

迫る弾丸を回避しながら少女は今だ動かない白衣の男を見た。注目すべきは金髪の少年ではなく、力も何かもかもが未知数なその男。

少年が無事であつたことから男は少女の一撃を防いだ事実がある。防御力に関しては申し分ないだろうことは確実。だつたら他の戦闘力は？

「らアアアアアアツッ!!」

気付けば少年の周りに増えてるスフィア。その数は最初の邂逅と同じかまたはそれ

以上。また物量で押しつぶそうとでも思つてゐるのだろうが、そう何度も同じ手に苦渋を味わう趣味など少女は持ち合はせてない。

「ロードカートリッジ」

『OK CART RIDGE ROAD』

二発。デバイスから飛ばされた薬莢の数だ。それだけでなげなしの魔力も多少はマシになるというものだ。弾丸に込められた魔力を撃ち出すことで取り出して制御化に置くカートリッジシステム。魔力が残り少ない時にこれほど便利な技術があつてよかつたものだと常々少女は思う。

その分対価は失敗『ミス』れば墜ちるというだけ。簡単なことだ。

「業火炎武つ！」

『BLASTER EDGE』

火を噴く砲身。唸り上がつたそれをあえて直線状にせず、鞭のように振舞う。もはやそれは刃ではなくて鬱陶しい虫[＊]を喰らう蛇だ。

別に刃だからといって剣のように使えなど言われる筋合いなどない。炎は最初から形無きもの。それをどういうふうに使うなど使い手の勝手だ。

「喰らいなさい」

クルクル、クルクルと少女はその場で舞つていた。足下には地面もないはずなのに、

まるで足場があるようにその場でクルクルと回る。つられて周る蛇の尾を壁状にと少女の身体の周りとぐろを巻くように蠢く。

ほら、なにも通さない要塞が完成だ。

「んう。やつぱりあれだね。カートリッジのドーピングはいつ見てもせこいとしか言いようがないね？」

「喋ツてる場合か?!てめエも少しは手伝いやがれツ！」

要塞の城壁ともいえる炎の壁を観察している男だが、どうにも動く気配がない。そういうしてる間にも要塞は鉄壁に変わっていくというのに。

「まあそう怒らないでよラーグ君？」

へらへらと笑う科学者は少年の名を告げ、ラーグはただ自分の名がこの場で呼ばれたことを疑問に思った。

「てめエ……どういうつもり」

「この場の解決方法は至極簡単だよ。なんといつてもここに僕がいるということだけでそれは決まつたも同然」

ラーグの言葉を遮つてまで言う男にラーグは戸惑いを隠せない。元から真っ当な考え方を持つてないことを知つてはいたが、ここに来て尚さらに理解できない。

「どれだけ城壁が堅くとも内側というものは脆いものだよ」

紫色の魔法陣。三角形の形作つたそれは小さく、男の拳大ほど。そんなちっぽけな魔法陣《もの》でいつたいなにができるというのだ。そうラーグは言わずにいられない。だが。

「惜しいね。本当に……。あまり魔力を使うと彼女に気付かれるから僕は君を殺すという選択肢をとることができない。君は運に味方されてるとしか思えないね」

その意味は本気を出す気はないということだとラーグはそう思つた。一応はラーグに魔法を教えた師匠みたいな存在ではあるが、男が戦つたとことなど、今まで見たことなどなかつた故に。

ラーグですら男の真価を図り損ねてしまう。

「まあそれでも君が僕に勝つことなど不可能だけど、ね」

ポンと陽気な音が男の掌からした。見れば驚掴みできる具合の丸まつた紫色の塊が男の手の上に。

塊は右腕。魔法陣は左手。

どちらも男の魔力特徴である紫色をしているので器用に二つの魔法を起動していることになる。ラーグは今だ並列思考^{マルチタスク}などといふものはしたことがないが、本場の魔導師でそれができないのは欠点に近くなるかもしれない。

科学者ということに関しては男は有能だ。それなりに頭は良い。

その賢さを持つてしたら並列思考など男にとつて至極簡単なことであるのかかもしれない。

「さあ悲鳴^音を奏でろ——小さな爆弾魔^{リトルボーアイ}」

ポイっと。まるで道端に空き缶を捨てるよう。神社の参拝客が賽銭を投げるよう。軽く。それが当たり前のように男は塊を投げ捨てた。

「はア?」

爆弾魔『リトルボーイ』と言われたことからそれはまごうことなく爆弾。それが目の前に軽く投げ捨てられた。どれだけの爆発力を備えられてるのかもわからぬそれが、今ラーグの目の前の中をさ迷うように投げ捨てられた。

意図できない行動。あまりものことから声が漏れ、思考が停止。炎の向こう側にいる少女もそれを見ているのなら男がなにをしたいのかわからぬだろう。

爆弾が目の前に捨てられたというのに男は焦りもしない。どれだけ小規模だろうがこの至近距離で爆発すればラーグも男も無事でいられる保証なんてありはしない。止まつた思考が加速した。

「な、なッ!!」

言葉にならない。だがそれよりも動くことが先決。平然とした男をよそにラーグは

その場から逃げようと動くが。

「大丈夫、大丈夫」

続いて男は魔法陣を爆弾に向けて “投げ捨てた”。

「自滅するほど僕はバカじやないよ？」

紫色の魔法陣は男の手から離れて尚その輝きを失わない。今や爆発寸前のそれを包み、魔法陣ごと目の前から消えた。

「超短距離転送。まあ僕の十八番だね」

刹那轟音。燃え盛る炎の内側から新たに火の手が上がつていた。

2

安心はしていなかつた。いくら強固の壁だろうがそれを維持し続けるにも魔力も足りない。ただの時間稼ぎに過ぎなかつたのだが、それでもいくらか手を考える時間をとれると思つていた。

やはり懸念は男だつたのだが、自ら手製の爆弾をその場に投げ捨てたのを見て何がしたいのかと疑問に思つただけ。

「なつー!」

目の前にその爆弾が転送ん^飛でくるまでは。

紫色の光を孕んだそれはすでに爆発寸前。所々鱗のように砕けたそこから紫色の光を漏らしながら、逃げる猶予も与えずに炎という壁に阻まれた密室の中で爆発。

『PROTECTION』

跳ね上がる右腕。瞬間に搾りかすのような魔力で張った楯も雀の涙ほどしか効果はなかつた。

空を搖るがした爆発音。ズンと低い音で煙を上げ、その下から出てきたのはボロボロの魔導師^{少女女教師}。

純粹な魔力で作られた爆弾であつたために物理的な被害だけだつたがそれでも羽織つていたマントは破れ、身体中にズキズキと打撲のような痛みを押し付ける。

咄嗟に張つたプロテクションの魔法も役に立たず、逆にそのせいで爆弾に近付いた右腕が一番被害を被^{こうむ}つた。

「一つ。……折れたわね」

だらりとぶら下がつた右腕は痛覚はありしも、動かすことができない。肘上辺りがポツキリと半ばから折れてる。

「どうだい。小さな爆弾魔^{リトルボーグ}のお味は?」

嫌らしく笑うその男。

小さな爆弾魔とはよく言つたものだ。その爆弾の規模は小さいその身からは考えられないほどの大爆発だ。

「まつたくもつて最悪だわ……」

そう最悪な状況だ。

「わたしはここでなぶり殺しにでも合うのかしら？」

利き腕が折れた。砲撃は撃とうにも片腕で撃てるほど柔な衝撃ではない。接近戦などもつての外。足はまだ生きているが、二人から逃げる自身も腕もない。

本当に状況は最悪だった。



爆弾が空を覆い尽くす。毒々しい紫色のそれは少女の視界いっぱいの空一面を覆い尽くしながら今か、今かと、爆発する瞬間を待っていた。

「逃がしあしないよ。いくら全力でやれないからと言つても、手負いの君程度……殺せないわけがないだろう？」

自らを科学者と名乗った男は少女に向けてそう言う。男は少女を生かして返すつもりは今はなかつた。先までは殺す気など一ミリとも思つていなかつたのだが、気が変わつたとでも言おうか。

既存の限界を超えるカートリッジシステム。そしてそれを扱えるだけの技量と度胸。実力で言えば今はまだラーグが一步前に出ているだろう。だがそれは少女がカートリッジシステムを使わなければの話。ならばラーグもそのシステムつを導入すればいいだけの話なのだが、それも無理だ。なぜなら少女に足りないのは実戦経験。

今まで組織に組みし活動してきたラーグは数々の実戦を経験した。だが、少女は魔法を扱えるようにだけを目的とした修業と、数少ない模擬戦だけ。いくら魔法を使えるようになつても経験がなければ上手く扱えないのは道理であり、そして多く実戦を経験したラーグが少女より強いのは当たり前のことである。

そう当たり前の話なのだ。

だが少女はそれをカートリッジシステムの恩恵だけで上回つた。本来ありえる話ではないのだ。

「生かして、逃がせば任務の障害となりえそうと判断したからね。容赦はしないよ」

それはすなわち少女の戦闘におけるセンスの高さが織り成す力である。

「冗談じやないわ……。こんなところで死んでたまるかつてのっ！」

折れた右腕を力ないようすにぶら下げ、左手に持ち直したパイロクイーンを突きだす。身体を動かすたびに鋭い痛みが右腕から発せられるが、少し顔を顰めるだけで少女は諦めもしない。

「プラスターナー！」

『B R A S T E R E D G E』

パイロクイーンから噴射される炎の剣。

「本来遠距離戦が本元のわたしが近接用の魔法を用意するなんておかしいと思わなかつたかしら？」

「そうかい？ いくらロングレンジだとしても、近距離に潜り込まれた時のために用意するものだと僕は思うけどね」

男が言うのもごもつともだ。遠距離。つまりロングレンジを得意としてても、どうしても近距離に潜り込まれたときに対応ができないようであれば、それはすなわち死を意味する。本来魔法は非殺傷という設定にして使うのが正しいのだが、少女も、男も、ラーグも魔導師ではあるが、魔導師ではない。

「僕らみたいな犯罪組織に身を置く者なら誰だつて死ぬ可能性があるからね。保身のために用意しておくものさ」

「そう……そうでしょうね。でもね、わたしは違うわ。わたしも本来の魔導師と同じよ

? ただ試験を受けずに探し物を探しているだけの魔導師よ。殺傷設定なんかも本来なら使うことないわ』

探し物。探し人とも捉える事ができるが、少女がこの二人にそれを伝えることはないだろう。それよりも本題である。

「わたしの魔法における才能は完璧な砲撃型と偏っていたわ。それこそ砲撃以外の魔法を使おうと思えば失敗するぐらいに』

たまにいるのだ。魔法における才能が完璧に偏っている例が。補助型や、近接型。そして少女のような砲撃しかできないような魔導師が。ならばどうして少女が砲撃以外の魔法を使えた?

『正確にいえばブラスター・エッジも砲撃なのよ』

そして炎が唸りを上げた。

1

少女の才能は確かに偏っていた。使える魔法は少しの補助や砲撃だけ。敵に近付かれてはシールドを張つて殻に籠るしか防御方はなく、すなわち近付かれれば落ちてしまふほどに本来なら接近戦は弱かつた。

そう本来なら。

だが少女は魔法のほかに炎熱変換という才能があつたのだ。魔力を自由に炎へと変換する才能が。それが少女に光の兆しを見せた。

砲撃しかできないなら砲撃だけをする。だがそれに炎熱変換を使ってアレンジして使えば。

「例えそれが元が砲撃魔法だとしても使い様が様々になるのよ！」

『SPARKS』

噴射していた炎が枝分かれしていく。噴射口から無数の火の弾となつたそれは弾幕を張り、空に舞う。それこそ紫色に染まつた空を塗りつぶす様な勢いで赤が広がる。まるで一つの火から迸る火の粉のように。

「へえ……」

「関心してる場合かツ！」

大小様々な火の弾。それは先に空を覆い尽くした爆弾へと手を伸ばす。一度刺激すれば爆発してしまうそれに炎などぶつければ。

「そうだねー。離脱するしかないかな？」

爆発。

そう爆発だ。一つの威力は小さめに設定されたそれだが、それでも空を覆い尽くすよ

うなその量と、その広がつた範囲。けして遠くない距離どうしに設置された爆弾は一つでも爆発すれば近くの爆弾へと連鎖していく。

つまり連鎖爆発だ。

少女の反撃の際に男が最も危惧してはいたが、これまでに少女が使つてきた魔法は単純な砲撃と、近接用の魔法。砲撃ならば爆弾を動かして回避することが可能だった、近づいてくれば爆弾を差し向けてやるつもりだつた。

だが。

「奥の手なんて隠しておくものよ」

男はどうやら少女を舐めていたようだ。どちらもが探し求める者を同じとした者同士。いざれ出会うだろうと監視し、今回初参戦のこの少女。

ずいぶんとしたたかであつた。

ニツと笑いながら爆風に紛れて消える少女と一緒に男とラーグは爆風が届く前に転移した。

近くの空でどでかい爆発音が響き、空を揺るがした。もうすでに真夜中に差しかつた時間ではあるが、こんな近所迷惑な大音量。たとえ空高くでも、地上まで響いたであろう。

道化は手汗を握りながら、爆発音が下方向へと睨みを利かせた。この距離では道化に気付かないだろうが、それでも睨まではいられなかつた。

もし、数秒でも結界が遅れてたら地上の人々が騒ぎだすところだつたのだ。

そして

「……最悪」

「G A !!」

現在道化は物体から飛び出た触手のようなものに手足を絡めさせられ、捕まつていた。しかも現在進行形で落下中。

かつ飛ばした空でトドメを差す算段であつたが、急な結界処置をしたために道化は空でありながら致命的なほどに隙を見せてしまつた。それも間近で、だ。

魔力の結晶体ともいえる物体には落ちたところでダメージはなさそうだが、道化は人間だ。空数百メートルを何の補助もなしに落ちれば死ぬに決まつている。

飛び立とうにも絡まつた物体が重すぎて飛べもしない。他人のミスを置つたせいで道化は死の間近であつた。